

「学び続ける教師」の基礎的・基盤的学修を支える「教職科目」の内容と指導方法についての一考察

溝 渕 利 博

A Study on the Contents and Teaching Methods of “Teaching Subjects” supporting basic and basic studies of “Teachers to keep learning“

Toshihiro Mizobuchi

要約

教員養成は、「大学における教員養成」と「開放制の教員養成」を2大原則として幅広い分野から多様な人材を求めて行われ、我が国の学校教育の普及・充実や社会の発展に大きな貢献をしてきた。しかし、現在、大学の教職課程には様々な課題が指摘され、教員免許制度についても、教育職員免許状が保証する資質能力と、現在の学校教育や社会が教員に求める資質能力との間に乖離が生じてきている。このような今日的課題等に適切に対応するために、課程認定大学においては、大学教育における教員養成の重要性の再認識や教育課程の改善・充実等が求められている。

本稿では、教員養成段階において、教職をめざす学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力や、学校現場が抱える課題に対応した実践的指導力を育成するために、実際の高校現場の実情を踏まえて必要とされる「学び続ける教師」を育てるための基礎的・基盤的学修を支える「教職科目」の内容と指導方法の在り方について考察する。

キーワード：教師論、生徒指導、進路指導、特別活動、教育相談

Abstract

After World War, teacher training has been carried out on two fundamental principles, "teacher training at university" and "open-systemed teacher training", and has made a great contribution to the dissemination and enhancement of school education and the development of society in Japan. However, various problems are pointed out in the teacher training course of the university, and the teacher licensing system is also divergent between the quality guaranteed by the teacher's license and the teacher's qualities required by the current school education and society.

In this paper, I consider the contents and the way of teaching methods of "Teaching professional subjects" supporting basic and basic studies of “Teachers to keep learning” based on the real situation of the high school site .

Keywords : teacher theory, student guidance, career guidance, extracurricular activities, educational consultation

受理年月日 2017年1月31日 高松大学経営学部教授

はじめに

戦後の教員養成は、「大学における教員養成」と「開放制の教員養成」を2大原則として幅広い分野から多様な人材を求めて行われ、我が国の学校教育の普及・充実や社会の発展に大きな貢献をしてきた。しかし、現在、大学の教職課程には様々な課題が指摘され、教員免許制度についても、教育職員免許状が保証する資質能力と、現在の学校教育や社会が教員に求める資質能力との間に乖離が生じてきている。このような今日的課題等に適切に対応するために、課程認定大学においては、大学教育における教員養成の重要性の再認識や教育課程の改善・充実等に努める必要があるとされている(1)。

本学経営学部では、毎年、在籍比で約2%の学生が教職課程を受講し、高等学校教育職員免許状(商業・情報)を取得している。本稿では、教員養成段階において、教職をめざす学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力や、学校現場が抱える課題に対応した実践的指導力を育成するために、高校現場の実務経験を活かして(2)、実際の教育活動の諸場面を想定した内容や具体的・体験的な学習形態を多くするなどして、高校現場に必要とされる「学び続ける教師」の基礎的・基盤的学修を支える「教職科目」の内容と指導方法の在り方について考察する。

1. 「教師論」の内容と指導方法

1) 「教師論」の内容と指導計画

① 本学経営学部における教職課程受講者の実態

本学には経営学部と発達科学部の2学部があり、発達科学部においては、子ども一人ひとりに対応できる教育のプロになるために児童教育コース、幼児教育コース、特別支援教育コースの3コースが設けられており、全員が教育職員免許状(幼稚園教諭、小学校教諭、特別支援学校教諭)あるいは保育士資格の取得をめざして教職・保育の専門科目を受講している。一方、経営学部においては、自ら考え、判断・行動して社会に貢献できる人材育成をめざして、2年生から企業経営コース、経営情報コース、会計コース、スポーツ経営コースの4コースが設けられており、自分の将来の進路目標に沿ったコース学習ができるようにカリキュラムが編成されている。また、高等学校教育職員免許状(商業・情報)の取得をめざす者に対しては、教職課程が受講できるよう配慮されている。教職課程の「教職に関する科目」では、1年生で教育学原論、2年生で教師論、教育課程論、教育心理学、教育の方法及び技術、特別活動の研究、生徒指導の研究(進路指導を含む)、3年生で教育制度論、教育相談、情報科教育法Ⅰ・Ⅱ、商業科教育法Ⅰ・Ⅱ、4年生で教育実習事前事後指導、教育実習、教職実践演習をそれぞれ受講することとなっている。

本学経営学部において、過去10年間、教職課程を受講して高等学校教育職員免許状（商業・情報）を取得した者は、表1のとおりである。これをみると、毎年、平均して在籍比で約2%の学生が教職課程を受講し、高等学校教育職員免許状（商業・情報）を取得していることになる。免許取得者の男女比は15：3で、男子学生のほうが多い。

表1 高松大学高等学校教育職員免許状取得状況

年 度	平 18	平 19	平 20	平 21	平 22	平 23	平 24	平 25	平 26	平 27	合 計
免許取得者	4 (1)	0	1	2 (1)	1 (1)	3	0	4	1	2	18(3)
卒業生	109	91	97	61	70	58	60	68	55	60	729
在籍比率 (%)	4	0	1	3	1	5	0	6	2	3	2

* () の数字は、女子の内数。

② 「教師論」の指導計画

授業の紹介 /Class introduction	<p>「教育は人なり」といわれるように、教育の成否は教師の人間性や資質・能力に深く関わっている。それだけに教職は生徒の人格形成に大きな影響を与える仕事なので、その崇高な使命感と責任感を自覚する必要がある。また現在、教育をめぐる諸問題が山積しており、それらに適切に対応できる教師の専門性や職能成長が求められている。本授業では、教職を志望する者に必要とされる教師としての使命感や責任感、教育愛に支えられた教育実践力等について、具体的な場面を想定しながら理論と実践の両面にわたって総合的に学び、高等学校教師に求められる豊かな人間性や資質・能力を身に付けるとともに、学位授与の方針及び教職に関する知識、技法、態度を修得する。</p>
到達目標 /Course goals	<ol style="list-style-type: none"> 1. 教職の意義や役割、教師の身分や職務内容等について理解できる。 2. 将来、教師となるための心構えや諸準備について自ら進んで学習できる。 3. 日々向上心をもって自覚的に学習や経験を積み重ねていけるよう「学び続ける力」を身に付けることができる。
授業計画 /Class schedule	<p>第1回 教師とは何か、教育とは何か (P.1~P.17)</p> <p>第2回 教師に求められる役割と資質能力 (P.18~P.28)</p> <p>第3回 教師の職務 (1) 生徒理解 (P.29~P.41)</p> <p>第4回 教師の職務 (2) 生徒指導 (P.42~P.62)</p> <p>第5回 教師の職務 (3) 学習指導と学習指導要領 (P.63~P.95)</p> <p>第6回 教師の職務 (4) 授業力をつける (P.96~P.113)</p> <p>第7回 教育行政の仕組み (P.115~P.124)</p> <p>第8回 教師の養成・採用・研修—教育員免許法・教員採用試験・教員免許更新制度— (P.125~P.135)</p> <p>第9回 教師の身分とサービス—教育公務員特例法— (P.136~P.140)</p>

	<p>第 10 回 教師の勤務条件 (P. 141～P. 148)</p> <p>第 11 回 日本の学校教育制度と学校の組織 (P. 149～P. 156、P. 229～P. 252)</p> <p>第 12 回 学校運営への参画と協力 (P. 156～P. 171)</p> <p>第 13 回 教育の今日的課題 (1) 道徳教育・部活動・キャリア教育 (P. 173～P. 202)</p> <p>第 14 回 教育の今日的課題 (2) 開かれた学校づくりと家庭・地域連繋及び教育接続 (P. 203～P. 228)</p> <p>第 15 回 これまでの授業のまとめと質疑応答～教師志望者としての自覚と自己変革に向けての取り組み～</p>
<p>授業時間外の学習 ／Overtime studies</p>	<p>毎回授業中に質問をするので、テキスト『教職論』の該当ページを予習し、自分なりの意見や感想をまとめておくこと。また、ユニットの区切りごとには小テストを行うので、ノートを取り授業の復習も怠らないようにしておくこと。本学図書館には、教職課程関係の参考図書が数多く所蔵されているので、積極的に活用すること。</p>
<p>成績の評価 ／Evaluation</p>	<p>授業への参加意欲や受講態度を重視するとともに、質問事項への応答内容・主体的な学習状況の度合い等 (10%) に加え、毎授業後に提出のリフレクションペーパー (10%)、ユニットごとの小テスト (20%) 及び学修ノート (20%) ・レポート (40%) の成績を総合して評価する。小テストについては、その都度、模範解答を示して講評し、授業時に返却してフィードバックする。</p>
<p>使用テキスト ／Textbooks</p>	<p>佐藤徹編『教職論－教職につくための基礎・基本－』（東海大学出版会、平成 22 年）</p>
<p>参考文献 ／Reference literatures</p>	<p>グループ・デイダクテイカ編『教師になること、教師であり続けること』（勁草書房、平成 24 年）教職問題研究会編『教職論－教員を志すすべてのひとへー』第 2 版（ミネルヴァ書房、平成 24 年）秋田喜代美・佐藤学編『新しい時代の教職入門』（有斐閣、平成 27 年）高橋陽一編『新しい教師論』（武蔵野美大出版局、平成 26 年）谷田貝公昭・林邦雄・成田國英編『教師論』（一藝社、平成 14 年）ほか、必要に応じて授業の中で適宜紹介する。</p>

2) 「教師論」の指導方法

① マンダラートを使用した「目標設定シート」の作成によるめざす教師像の見える化

「教師論」の授業において、人間の成長に深くかかわる教師の役割や仕事の内容、責任の重さなどについて法令等に基づいて深く理解させるとともに、将来のためにめざす教師像をはっきりさせる必要があると考えて、グループ学習等で自分にとって忘れられない恩

師とはどんな教師であったかやどんな教師になりたいかををお互いに語り合わせることで、優れた教師像を具体的にイメージできるよう工夫した。また、これから教師になるために必要な学習の範囲や内容について、学生がその全体像を目に見える形で把握できるようマンドラートを使った目標設定シートを作成させた。プロ野球の大谷翔平選手が使用したことで有名になった「マンドラートを使った目標設定シート」を作成させることによって、学生からはこれからの学習活動や人間形成面での目標ができて教職への強い意欲が湧くとともに、めざす教師像や教職への学習目標及び人間形成面での目標づくりに役立ち、学び続けることの大切さを実感できたとの感想が寄せられた。

マンドラートは、今泉浩晃氏が開発したアイデア思考法で、問題解決や目標達成の形をデザインするものである(3)。マンドラートを使った「目標設定シート」は、 $3 \times 3 = 9$ つの正方形セルマトリックスを作り、その真ん中の1つのメイン目標に対して8つのサブ目標を考えさせ(中心マンダラ)、そのサブ目標に対してさらに8つの目標を設定しながらこれを繰り返すこと(周辺マンダラの展開)で、アイデアが広がり思考が深まるとともに、目標が具体化、細分化され、達成されやすくなっていくという効果が期待される。学生には、この「目標設定シート」を使って、真ん中のセルに「立派な教師をめざすために」というメイン目標を立てさせ、あとの80個のセルを順次埋めて行って完成するよう課題を課した。次の図1は、受講生の内の一人の学生Aが作成した「教職マンドラート図」である。

図1 学生A作成の「教職マンドラート図」

自己理解	雰囲気 に 流され ない	プラス 思考	異文化 に 触れる	継続力	パソ コ ン	体 力	部活動	生活 リ ズム
熱 情	メンタル 面	真剣さ	話を聴く	豊富な知 識	授 業	1 日 3 食	健 康	早寝早 起き
信 念	責任感	集中力	ニュース	読 書	学外活 動	スケジ ュール 作り	身体 の ケア	ルー テ イン
研 修	計画性	教育実 習	メンタル 面	豊富な知 識	健 康	ボラン ティア	礼 儀	先見力
出 席	教員免許 状取得	予習・復 習	教員免許 状取得	立派な教 師になる ために	立派な 社会人	日々成 長	立派な 社会人	挨拶
努 力	授業を理 解	文字を きれい に	人間性	採用試験 合格	環 境 づ くり	人 脈	日々努 力	自主性

愛される人間	感情をコントロール	T P O	身だしなみ	採用情報を収集	第一印象	道具を大切に	家族を大切に	出合いを大切に
思いやり	人間性	感謝	面接	採用試験合格	学力	色々な経験	環境づくり	勉強できる環境づくり
応援される人間	信頼される人間	色々な考え方	柔軟性	適応力	自信を持つ	チャレンジ精神	仲間を大切に	ゴミ拾い

教職課程受講初年次の学生たちが、目標である立派な教師となるために必要なものとして挙げたのは、①人間性に関するもの…信頼される人間、心、メンタル、ボランティア精神、②授業力に関するもの…豊富な知識、指導技術、生徒理解、③社会人に関するもの…挨拶、日常生活力、コミュニケーション力、④健康に関するもの、⑤教職に関するもの…日々の勉強、大学卒業、教職科目単位取得、教育職員免許状取得、採用試験合格、⑥その他…文武両道、部活動、先輩・後輩関係、であった。特徴的なのは、②授業力に関するもの以外に、①人間性に関するものや③社会人に関するものが多く、彼らがそれらを理想の教師の条件として挙げていることである。つまり、教師には、専門教科を教える、いわゆる「教科の教師」としての側面以外に、人間としての生き方を教える「人間の教師」としての側面が必要だと考えていることが分かる。ここには、彼らがこれまでの被教育体験の中から醸成されてきた理想の教師像というものが、そのまま如実に現れていると考えられる。今後、4年次の教育実習を終えた後に、もう一度同じ「教職マングラート」を作成させてみると、高校現場の実情を踏まえたより実践的で具体的な内容のものが増えてくるのではないかと想像される。えてして中間学年になると、学生生活に慣れて気が緩みがちになるので、教職課程受講学生には、このように定期的に自らの進路目標を意識させる取り組みを授業の中に入れて、目の前の授業と自分の進路目標とがどのような関係にあるかを常に意識させながら行う必要があると思われる。「学び続ける教師」としての意識や態度は、教員に採用されてからではなく、学生時代の毎日の学生生活の中で形作られ、育てられるものだと考えられるからである。

② 授業振り返りシートにみる初年次教員養成段階における教職意識の特徴と課題

「教師論」の授業では、毎授業時間後に下記図2のような「授業振り返りシート」(Reflection Paper)を提出させることによって、学生個人に授業の振り返りやまとめ、今後の自身の学習課題等について内省させるとともに、次回授業に向けた自覚的・計画的な授業外学習活動を促すようにしている。

図2 「教師論」授業振り返りシート

「教師論」授業振り返りシート Reflection Paper	
平成（ ）年（ ）月（ ）日	
学籍番号（ ）	
氏 名（ ）	
①	今日の授業のテーマは？
②	今日の授業の内容とポイントは？
③	自分が今日の授業でクラスまたはグループに貢献した活動内容
④	今日の授業の感想・疑問点など（大学の授業では「なぜ」と考える習慣を身につける必要がある。今日の授業で自分なりに「教師論」について考えたことを書きなさい）。
⑤	自分の今後の課題

上記リフレクション・シートの感想部分を通して見た教員養成初年次段階における教職課程受講学生の教職認識の実態について、その主なものをまとめてみると次のようになる（下線部は筆者）。

○初回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 自分がなぜ教師になりたいかをもう一度しっかり考えるべきだと思いました。また、教職課程以外のボランティア活動などに取り組む姿勢や態度などでも、自分が本当に教師に向いているかなどを知れるとわかりました。学生にとって、学習ノートがなぜ大切なのかを知れてよかった。
- B 教職課程の内容、教師の仕事、採用試験等について知ることができた。教師には、授業だけでなく人間性も大事で、両方を備える必要があると感じた。
- C 普通の授業より集中して授業に取り組んでいかなければならないと思った。高校では習ってこなかった科目なので真剣に学習する。
- D 今日、初めて教職のことについて考えてみたけれども、自分が知らないことが沢山あったので、もっと予習や復習をして、意識を少しずつでも高めていけるよう取り組んでいきたい。教師は一つ一つの言葉が大切だと思った。

<自分の今後の課題>

- A 授業内容の大切な所を的確に抜き出して上手にまとめる力を身に付けるとともに、自分の考え方をしっかり持って、幅広い知識を身に付けていく。
- B 自分をもっと高めていきたい。予習・復習を習慣化できるようにしていく。自分の意見

をもっとうまくまとめられるようにする。

- C まとめや要点を探し出す所で、重要なところを見つける能力を身に付ける。
- D 根本的なところから学習していかなければならないので、少しずつやっていきたい。

○中間回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 漢字にはとても深い意味が込められていて、「雑」という漢字を学ぶなかで、雑にしている（扱っている）のは、実は人間の方だというのが深かった。教師になるための研修は日頃からしたいと思います（教師に求められる役割と資質能力）。生徒指導の方法で、集団面接を高校時代にやったことがあるが、ほとんどの人が話すことが出来ずに、逆効果のイメージがあったので、ケースバイケースが大切だと思った（教師の職務：生徒指導）。ゼロトレランスの考え方は賛成です。やはり段階的指導では、一度の問題行動が問題とは思わないこともあると思うし、「次はバレないようにどうしたらいいか？」という考え方が生まれそうだからです（生徒指導）。日本の教育は、経験主義や系統主義を行ったり来たりしているんだなあと思いました。海外はどのような感じなのか気がなりました（学習指導論）。18歳の成人と選挙権の問題は、とても難しい問題ですが、僕は賛成です。しかし、飲酒による暴力事件や、朝、起きれない人が多くなるなどの問題も増えます（教育行政）。教職員の仕事には、色々な仕事があって、実習助手や事務職もやってみたいと思いました（教員養成と採用）。免職と降任の事由で、勤務成績が良くない場合の具体例が浮かばなかった（教師の身分と服務）。休業日も勤務日とは知りませんでした（教師の勤務時間）。校訓を思い出せてよかった。校訓にはいろいろな意味があってとても深かった（学校運営への参画）。部活動の勝利至上主義は、教育に悪いイメージがあるが、僕は良いイメージもあるので賛成派です（教育の今日的課題）。学校の地域化はとても大切だと思いました。そして自分が育った小・中は素晴らしかったと再確認しました（開かれた学校づくり）。
- B 教えるにしても、授業だけ、人間性だけというように、どちらかだけではダメで、その両方を備えることが必要だと思った。自分をもっと高めていく必要があると考えた（教師の役割と資質能力）。幼稚園・保育所の現状について詳しく知れたので良かった（青年期の課題）。中学校から問題行動を起こす生徒が多いので、小学校時代から粘り強く人間性を高めていく必要があると思った（生徒指導）。良い授業をするには、生徒を第一に考えることが大事で、またそうすることで自身の能力も上がると思う（授業力をつける）。憲法一つで、日本の仕組みが変わってくるので、あまり変えない方がよいと思いました。18歳で成人でも良いと思いました（教育行政）。教員としての採用だったり、試験だったり知れた。教員を続けていくなかでも、研修（研究と修養）を受けて、さらにレベルアップをしていく必要があると知り驚いた（教員の養成と採用）。教員という立場に立ってみると、色々な義務やサービス制度があり、守らなければならないこ

とがたくさんあるので、気をつけないといけないと思いました（教師の身分と服務）。休息と休憩の違いが理解でき、学校の休み時間などの意味や理由が知れたので良かった。給与などについてもいろいろな手当があることを知れ良かった（教師の勤務条件）。昔は今と違って時代も違っていたので、自由に学ぶことができなくて、進路なども決まっていたと思うので、今の時代は自由なので昔の人の分まで、しっかりとやらないといけないと思いました（教育制度）。学校経営としていくに当たって、校訓なども、その一つに関係しているんだと知り、驚きました。校訓も調べれば深い意味があるんだと知りました（学校運営への参画）。道徳教育は大事だけど、小・中でしっかりと叩き込んで、高校の時に実践できる力を身に付けることが必要だと思いました（今日的課題）。地域の人もっと学校を知ってもらわなければならないと思った。そのために学校の方から地域に出ていくことが必要になってくると思いました（開かれた学校づくり）。

C 覚えることが多いので、しっかりとノートに書いて、読んでいく必要があると思った。教育基本法の教育の目的の部分の部分をしっかりと覚える（教師の役割と資質能力）。生徒一人ひとりのことをしっかりと観察しなければならないし、教員全員で助け合って、生徒を育てなければならないことを知った（生徒理解と青年期の課題）。日本とアメリカの生徒指導の方法の違いを知り。いろいろな生徒指導の方法があるんだと思った（生徒指導）。学習指導要領がいろいろと変わっていていることを知り、その時代にあった学習指導を行わなければならないと思った（学習指導論）。教える立場になると、受ける側の気持ちを優先して授業をしないといけないと思った（授業力をつける）。戦前と戦後では、教育の在り方が違うことを知り、様々な原理のもとで行われていることを知った（教育行政）。教員免許状には3種類があることを学び、また教員に採用されても、日々の研究が必要なことも知った（教員養成と採用）。教員としてのあるべき行動をしっかりとしていかなければいけないことを知った。様々な義務があり、それらを守っていく必要があると感じた（教師の身分と服務）。教師の勤務条件や給料などについて学んだ（教師の勤務条件）。学校では、学校目標としての校訓（部訓）などとして伝えていることを知った（学校運営）。要点をしっかりと押さえて、道徳など社会に必要な能力を学んでいく必要があると感じた（今日的課題）。地域社会と連繋して、よりよい学校生活を届ける必要がある（開かれた学校づくり）。

D 教師にはいろいろなことが求められたり、条件などがまだまだあったので、一つ一つ大事に覚えていかないといけないと思いました（教師の役割と資質能力）。今日の授業で、一つ一つの言葉が大切だと思ったから、今後は気を付けて行動したい（生徒理解と青年期の課題）。改めて学習指導にどんな役割があるのかや、様々なカリキュラムの役割が少しでも分かったことが良かった（学習指導論）。どのような授業をすれば、生徒と教師の距離が縮まり、生徒がどのような授業を受けたいかなどが分かった（授業力）。今までの教育とか法律が今日少しでも分かったし、今後の法律がどうなるのかと思いました（教育行政）。教師の身分がどのようなものか、教師になればいろいろなところに気

を配って行動しなければいけないと思いました（教師の身分と服務）。教師がいつどのような場で、どういった条件で働いているかが分かった。給料なども詳しく分かったので、そういったことを意識していきたい（教師の勤務条件）。自分の母校の校訓を久しぶりに聞かれて、少ししか覚えていなかったのも、しっかり覚えるきっかけになった（学校運営）。道徳教育、部活動指導、キャリア教育などさまざまなことを学べた（今日的課題）。学校がこれからどのようにすれば良いかや、連携と接続の違いも詳しく分かったので良かった（開かれた学校づく）。

<自分の今後の課題>

- A 日頃からの自己研修と健康でいること、文字をキレイにすることが大事（教師の役割と資質能力）。生徒目線をしっかり考える（生徒指導）。教師として、自分の考え方をしっかり持ち、いろいろな知識を身に付ける（教師の職務）。PISA的学力についてもっと知る（学習指導論）。小テストでは、あやふやではなく完全に正しい解答ができるようしっかり覚える（授業力）。ネットなどで各県の採用試験のことなどを見してみる（教員養成と採用）。免職と降任の事由について調べてみる（教師の身分と服務）。道徳のことを深く考える。学校の地域化はとても大切だと思いました（教育の今日的課題）。小テストの復習。
- B 将来、教師になるために、前のボードに書くときには、もっと文字をきれいに書けたらと思いました（教師の役割と資質能力）。社会のことをもっと詳しく知れるようにする（青年期の課題）。携帯電話の使い方やマナー等を身に付けて、他人に教えられるような知識を持てるようにする（教師の職務）。勉強して身につけて行くことがたくさんあると感じました（学習指導論）。どういった授業スタイルがあるのかを人に聞いたり、考えてみる（授業力）。憲法についてもっと知っておく必要があり、興味を持てたので、継続していく（教育行政）。各県の採用試験のことなどについて調べる（教員養成と採用）。教師になる前にまずは学生としての義務をしっかりと果たしていきたいと思いました（教師の身分と服務）。教師の給与などについてもっと知りたいと思いました（教師の勤務条件）。テストを見返して、間違ったところを覚える。学校運営の組織としてもっと役割があるのかを調べる（学校運営への参画）。採用試験の過去問題などをチェックして解いてみる（今日的課題）。
- C 教師として、生徒に見やすく、黒板の文字がナナメにならないようきれいに書く（教師の役割と資質能力）。予習・復習をしっかりとする。人間観察など相手のことをしっかり見て、日々の変化などを知れるようにしたい（生徒指導）。時代や世間の流れにあったような学習方法が行えるようにする（学習指導論）。各授業での振り返りや小テストの復習を充分に行う（授業力）。今のうちから色々と準備していかなければいけないと思った（教員養成と採用）。レポートの為の準備を始める。小テストの点数が悪かった部分の内容を読み書きして忘れないようにする。
- D 教育の目的をしっかりと覚える（教師の役割と資質能力）。自分の生活面での行動を見

直す（青年期の課題）。まだまだ、自分の知らないことがたくさんあるので、少しずつ知れたら良いと思いました（教師の職務）。今からでも教員の養成や採用の言葉を頭のどこかに入れて意識していきたい（教員養成と採用）。小テストの勉強。レポートのサブテーマを考え、少しずつ準備を始める。小テストを勉強していたけれども、全然頭に入っていなかったのもっと効率よいやり方を考えたい。小テストはもう一回色々なことをおぼえてきたので良かった（学校教育制度）。

○最終回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 15回の授業の内容はとても濃く、勉強になることばかりでした。
- B 15回を通して授業の間に小テストを挟むことで、内容が覚えやすく良かったと思います。また、自分の意見をしっかりと持てるようになったので良かったです。
- C 小テストで、あやふやに覚えていたことが多かったので、しっかりと覚えておく必要があると思った。
- D 色々なことをたくさん学べたので良かった。

<自分の今後の課題>

- A 学校の地域化はとても大切だと思う。今後、部活動の学校教育・学校体育から社会教育・社会体育への移行問題等についても考えていきたい。
- B 教職課程の単位を取得して、めざす教師に少しでも近づけるよう頑張りたい。
- C 日々を大事にし、常に向上心を持って何事にも積極的に取り組んでいく人間になりたい。
- D 教師になるために必要なことをやっていきたい。

以上の授業振り返りシートの内容から見えてくる教員養成初年次段階における教職課程受講学生の教職認識の特徴と課題について、まとめると次のようになる。

- ① 初回の授業は、教職課程との最初の出会いの場面であり、また、今後の授業のスタートラインにも当るので、教師の仕事の重要性や崇高性などを考えさせるのに極めて重要な役割がある。授業後の振り返りで、受講学生は、なぜ自分は教師になりたいのかを自問自答しながら、教職科目に対して普通科目の授業より集中して取り組まなければならないという特別な感情と意識を持っていることが分かる。また、今後は自分の考え方や幅広い知識を身に付けなければならないという気持ちを抱いて、予習・復習の習慣化や授業の要点まとめなど具体的な学習活動への課題等についても言及するなど、教職課程を受講しない普通の学生に比べて学習意欲や学習態度の面でも高い意識を持っていると感じられる。
- ② 中間回の授業では、学生の現場体験が不足しているため、具体的な教師論や教育論の内容になると、学生の被教育体験の個人差によって、その教師観や教育観に差が出て

くることが見られる。例えば、Aは「部活動の勝利至上主義には賛成」、Bは「中学校から問題行動を起こす生徒が多いので小学校で人間教育を、道徳教育は小・中でしっかり叩き込んで、高校では実践力を身に付けさせることが必要だ」と考えている。また、学習意欲や学習継続力の差が学習内容の理解力や深化の差となって表れてきていることも分かる。Aは「教師になるための研修は日頃から必要だ」と考え、授業後の感想も自分の意見を理由を添えて表現できるようになっており、Bも「教師になるためには自分を持って高めていく必要がある」と認識して、「他人に教えられるような知識を身に付けたい」と、授業内容の把握は勿論、その上に自分の将来の目標を見据えた課題認識を持って計画的に授業に取り組んでいるが、Cは「覚えることが多いので、予習・復習をしっかり行うこと」、Dも「小テストの勉強・レポートの準備」などを挙げ、むしろ現在の授業内容の理解のほうに重点をおいた学習を行っている。しかし、重要なことは、全員が今後の課題として挙げたことで、教職の課題を現在の自分自身の学生生活の在り方に結び付けて考えていることである。Aは「生徒目線を身に付け、教師として自分の考え方をしっかり持って、色々な知識を身に付けたい」、Bは「教師のなる前に、まず学生としての義務をしっかり果たしていきたい」、Cは「人間観察など相手のことをしっかり見て、日々の変化などを知れるようにしたい」、Dは「自分の生活面での行動を見直したい」、など自己変革への宣言をしていることに注目したい。

次に、この時期の特徴として、今まで教えられる生徒の立場でしか教職について見ていなかったのを、教育法規等の面から具体的に説明すると、驚きをもって、教師の身分や職務について理解することができたと同様に感想を書いている点である。例えば、Aは「学校の休業日は勤務日であったこと」、Bは「教員には研修の義務があること」、「学校の休み時間と教員の休息・休憩時間との関係について知れたこと」、Cは「教育職員免許状には3種類の免許状があり、教員には色々な義務があること」、Dは「教員の身分や服務、給料・諸手当などの勤務条件などが分かったこと」、など生徒の時代には知らなかった教育現場の実情について、受講生は非常に興味深く関心を持って聴いていたのが印象に残っている。今後は、この時期の指導において、教師になるための心構えだけでなく、教師の身分や服務、勤務条件など現実の教育現場の実情や教師の姿を法令等の根拠を示しながら説明していくことで、学生が具体的な教師像をイメージしやすくなるのではないかと考えた。

- ③ 最終回の授業では、全授業のまとめと質疑応答を行ったが、「内容が濃く色々なことが学べて勉強になった」(A, D)、「間に小テストを挟むことで内容が理解しやすかった」(B, C)、という授業内容に関する感想とともに、「学社移行教育の問題についても考えながら」(A)、「教職単位を取得して、めざす教師に少しでも近づけるよう頑張りたい」(B)、「日々を大事に、常に向上心を持って何事にも積極的に取り組んでいく人間になりたい」(C)、「教師になるために必要なことをやっていきたい」(D)

などと教師になるための各自の目標に向けた決意表明が語られた。

これらを、授業の到達目標である「1. 教職の意義や役割、教師の身分や職務内容等について理解できる。2. 将来、教師となるための心構えや諸準備について自ら進んで学習できる。3. 日々向上心をもって自覚的に学習や経験を積み重ねていけるよう『学び続ける力』を身に付けることができる。」に照らして総合的に考えてみると、1. 2の授業の内容面での振り返りにおいては、教師の仕事が幅広い分野に亘っていることを理解させることはできたが（その内容も別途レポートにまとめて提出させたが）、教職論の原点である教職の重要性・崇高性などについての言及がなかったことは残念であり、最後にもう一度その点を押さえるべきであったと考えている。また、3の今後の課題については、概ね各学生ともに教職科目の重要性とその学習にむけた取組を自覚的に認識してくれたのではないかと思われる。

3) 小括—教員養成段階において「学び続ける教師」を育てるための基礎的・基盤的学修に必要なこと—

「教育は人なり」といわれるように、教育の成否は教師の人間性や資質・能力に深く関わっており、それだけに教職課程を受講する学生には、その崇高な使命感と責任感を自覚させる必要がある。併せて教員養成段階には、「学び続ける教師」を育てるために必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を行うとともに、教育現場に必要とされる実践的指導力の基礎を育成し、自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場の具体的な場面を想定しながら教職の理論と実践を擬似的に学習場面で体験させることも必要である。以下、「学び続ける教師」を育てるための基礎的・基盤的学修に必要なことを挙げてみる。

第1点は、「書く力」を育てることが「考える力」や、ひいては「学び続ける教師」を育てることに繋がる・・・

書くことによって自らの考えを整理する力や、それを相手に分かり易く説明できる力、さらに自分の今後の学習課題を自覚して、それに向けた努力を続ける力を育てることができる。そのために授業では、アクティブ・ラーニングの基礎となる学生の「書く力」や「考える力」を養成するために、学習ノートや小論文、毎時間後のリフレクション・シートの提出を義務付けるとともに、ユニットごとの小テストやレポート作成で小論文を書かせるなどして、学生に「書く力」や「考える力」を身に付けさせ、学習習慣と学力の定着を促す授業を行った。その結果、受講態度が良くなり、学生の予習・復習など授業外学習力やノート力・レポート作成能力の向上に結び付けることができた。

第2点は、良い先生、良い本に出会うことが最良の教員養成である・・・教職をめざそうと思った動機について、毎年受講生に聞いてみると、殆んどの学生が小・中・高等学校に出会った先生に影響を受けて、自分もそのような先生になりたいと思ったことがきっかけであったと述べている。このように恩師と呼ばれる良い先生との出会いとその時に受けた

被教育体験が、その後の人生の進路選択に大きな影響を与えていることが分かる。それを受けて授業では、恩師と呼ばれるような先生には共通点があることに気づかせ、自分のめざす教師像を「教職マダラート」の作成などで見える化することによって、より具体的な目標設定をさせる工夫を行った。また、教職をめざす中で、その意志を強くした本との出会いを挙げる学生もいた。本の中のたった一言の言葉に感銘を受けて、その後の人生の座右の銘とするなど、良い本との出会いも人に夢と勇気を与える力を持っていると考えられる。教師になるために参考になる良書の紹介は勿論、常日頃の教師の発する言葉にも大きな教員養育力があることに気を配りながら授業を行う必要があると感じた。その点、教員養成段階における教職科目担当教員には、一般教科科目担当教員とは違った資質と指導能力が求められると思う。

第3点は、実際の高校現場を想定した授業内容や指導方法が学生を鍛える・・・学生の教育現場における経験や実践の不足による教職に対する認識や使命感についての甘さに対して、高校現場の実態や実情に応じた授業内容や指導方法の在り方について工夫改善する必要がある。これまでは学生は、被教育者の立場から教育を受け身で見ていたが、これからは教育者の立場に立って教育を責任者として実践することになるので、その責任の重大さは勿論のこと、教師予備軍としての自らの意識の転換も図らなければならない。その際、特に高校現場の実務経験者教員には大きな役割が期待され、理論と実践の両面に亘った実践的な授業内容や指導方法の導入などの新たな取組と工夫が要求されている。学校現場の実態や教職使命感の大切さなどについて具体的な事例をもとにアドバイスを行うとともに、学校現場に即したより実践的な指導力の基盤となる力の育成に努めていく必要があると感じた。

第4点は、「学び続ける学生」が「学び続ける教師」になる・・・学校は社会の縮図であり、人間を育てる教育機関であるので、教職に就く者には人間とは何か、人間の生き方などについて深く考えさせる必要がある。特に最近の教育現場の状況を勘案すると、学生をより人間通の教師に育てるためには、教職科目の授業の中に、哲学や倫理学、心理学、歴史学、社会学などの、広い意味での人間学に関する話や資料を取り入れて、教科指導だけではない、もっと幅広い人間性の育成や教育社会人として必要な常識・マナーの習得をも含んだものに教職の学びの内容を広げて、教員養成段階における担当教員は心掛ける必要があると思われる。また、教職科目の学習は、将来の就職のための学習ではなく、学生自身の現在の学生生活をどう送るかという現在進行形の学習に関係していることに早く気づかせることが重要であり、そのような自己改革を迫る授業内容が学生を「学び続ける学生」に育てるということに繋がると考えられる。このように学生の時代から絶えず自己研鑽に励むという習慣を身に付けた「学び続ける学生」を育てていくことが、「学び続ける教師」を育てることに繋がるものと思われる。

2. 「生徒指導の研究（進路指導を含む）」の内容と指導方法

1) 「生徒指導の研究（進路指導を含む）」の内容と指導計画

<p>授業の紹介 ／Class introduction</p>	<p>現在、学校現場ではいじめ、不登校、校内暴力、非行など生徒指導上の問題への適切な対応や、フリーター、ニート、早期離職率の増加など勤労観や職業観に関わる進路指導上の課題への積極的な取組みが強く求められている。そして生徒指導（ガイダンス）と進路指導（キャリア教育）は、教科指導とともに高等学校教師の必須条件となっている。本授業では、「生きる力」の育成をキーワードに、生徒指導・進路指導に関する基本的な考え方や実践的な理論及び方法について具体的な事例をもとに理解を深めるとともに、学位授与の方針及び高等学校教師に求められる教職に関する知識、技法、態度を修得する。</p>
<p>到達目標 ／Course goals</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 将来教職をめざす者として生徒指導・進路指導に関する基礎的・基盤的な知識・技能を身に付けることができる。 2. 生徒理解の方法や生き方の指導に関する理論及び方法について理解できる。 3. 実践的に物事を考える態度や学び続けるための思考力を身に付けることができる。
<p>授業計画 ／Class schedule</p>	<p>第1回 オリエンテーション・生徒指導の歴史と発展（P.9～P.16） 第2回 進路指導の歴史と発展（P.17～P.36） 第3回 人格理論・発達理論（P.37～P.48） 第4回 環境論・グループガイダンス理論、カウンセリング理論（P.49～P.54） 第5回 生徒指導の理念と性格（P.55～P.67） 第6回 進路指導の理念と性格（P.68～P.74） 第7回 生徒理解の意義と内容、生徒の個人資料の収集と活用（P.75～P.87） 第8回 生徒指導における心理検査の活用（P.87～P.96） 第9回 生徒指導・進路指導の校内組織（P.97～P.104） 第10回 生徒指導・進路指導における教師の役割（P.104～P.114） 第11回 教育相談・進路相談の方法と技術（P.115～P.134） 第12回 高校における生徒指導・キャリア教育の計画と実践（P.160～P.174） 第13回 生徒の問題行動と少年非行（P.175～P.190） 第14回 不登校・高校中退問題（P.191～P.200） 第15回 これまでの授業のまとめと質疑応答～生徒指導・進路指導のアセスメント～（P.201～P.216）</p>
<p>授業時間外の 学習</p>	<p>毎回授業中に質問をするので、テキスト『最新 生徒指導・進路指導論』の該当ページを予習し、自分なりの意見や感想をまとめておくこと。また、ユニッ</p>

／Overtime studies	トの区切りごとには小テストを行うので、ノートを取り授業の復習も怠らないようにしておくこと。本学図書館には、生徒指導・進路指導関係の参考図書が数多く所蔵されているので、積極的に活用すること。
成績の評価 ／Evaluation	授業への参加意欲や受講態度を重視するとともに、質問事項への応答内容・主体的な学習状況の度合い等（10%）に加え、毎授業後に提出のリフレクションペーパー（10%）、ユニットごとの小テスト（20%）及び学修ノート（20%）・レポート（40%）の成績を総合して評価する。小テストについては、その都度、模範解答を示して講評し、授業時に返却してフィードバックする。
使用テキスト ／Textbooks	吉田辰雄編著『最新 生徒指導・進路指導論—ガイダンスとキャリア教育の理論と実践—』（教職課程シリーズ、図書文化社、平成 18 年）
参考文献 ／Reference literatures	『高等学校学習指導要領』（文部科学省、平成 21 年）『生徒指導提要』（文部科学省、平成 22 年）『小・中・高キャリア教育推進の手引き』（文部科学省、平成 18 年）高橋超・石井眞治・熊谷信順編著『生徒指導・進路指導』（ミネルヴァ書房、平成 14 年）松田文子・高橋超編著『生きる力が育つ生徒指導と進路指導』（北大路書房、平成 17 年）ハヴィガースト, R. J. 著・荘司雅子訳『人間の発達課題と教育』（玉川大学出版会、平成 7 年）ほか、必要に応じて、授業の中で適宜紹介する。

2) 「生徒指導の研究（進路指導を含む）」の指導方法

① 部活動における生徒指導・進路指導（キャリア教育）機能

生徒指導は学校の教育活動全体を通じて、管理職のリーダーシップの下に、全教職員がそれぞれの役割を担い、全校体制で組織的に行うものである、とされている。学校教育は、学習指導と生徒指導が車の両輪のごとく一体的に進められているところに特色があり、特に生徒指導については教育課程の内外を問わず、学校全体の全教育活動を通じて包括的・系統的・組織的に行われるものなので、教育課程外の諸活動についても生徒指導のねらいを明確に示す必要がある。生徒指導の意義や原理の理解はもちろんのこと、教科指導、進路指導、キャリア教育、特別活動、部活動など幅広い学習が必要とされている（4）。

高等学校の部活動については、高等学校学習指導要領に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること」と記されており、教育課程と部活動との関連が明記されている。部活動には、

①学校教育への機能…イ. 学校の教育活動を円滑に進める部活動生の出現、ロ. 学校のアイデンティティの創出と特色づくりに貢献、ハ. 保護者やOB・OGなど多様な人間の学校参加の促進、②生徒の教育への機能…イ. 人間的な成長や精神面での成長、ロ. キャリア教育に通ずる教育の実施、③教師生活への機能…イ. 教師への多様な人材の確保、ロ. 他校の教師との交流など教師同士の関わりの促進、ハ. 教師生活を続けるための活力の獲得、の3つの機能がある、とされている。このように部活動は生徒理解や生徒指導など「人間形成」に関する役割と機能を有しており、部活動の教育的意義とともに、教育課程上に位置付けられた教科指導などの教育活動と教育課程外の部活動指導とを関連付けながら指導できる部活動顧問教師の存在と役割は極めて大きいといえる(5)。

特に運動部活動は、学校教育の一環として、スポーツに興味と関心をもつ同好の生徒の自主的、自発的な参加により、顧問の教員をはじめとした関係者の取組や指導の下に運動やスポーツを行うものであり、現在、高等学校では約42%の生徒が参加しており、多くの生徒の心身にわたる成長と豊かな学校生活の実現に大きな役割を果たし、様々な成果をもたらしている(6)。

因みに平成28年度の「生徒指導の研究(進路指導を含む)」の受講者は、全員経営学部でサッカー部に所属しており、小さい時からサッカーに親しみ、将来は高校の教員になってサッカー部の顧問をやりたいと思っている。彼らの人間形成の上で、サッカー部の果たした役割は大きいものと想像され、その被教育体験に基づいた教職イメージを持って教職をめざしている点は否めない事実である。そこで高校教育における部活動の位置づけと部活動による生徒指導・進路指導(キャリア教育)の役割機能との関係を中心にして生徒指導・進路指導の理論と実践について考えさせ、より具体的な教職イメージを描きやすいように工夫している。

受講生が全員サッカー部であることもあって、適宜、本学のサッカー部監督とは懇談をして意見交換を行うことがある。監督は元Jリーガーで本学での監督歴は13年である。監督との意見交換で、いつも思うのは、授業でも部活動においても、学生の取り組む姿勢や態度には共通したものがあるということで、両者は全く別物ではなく、密接に繋がっているという共通した認識である。例えば、本学サッカー部のモットーは「最後まで諦めない」で、全員でつなぐパスサッカーをめざしてチーム一丸となって戦うことであり、同時に相手チームに対するリスペクトを大切にすることである。この指導方針に基づいて、以下、4点を特に重視して指導しているとのことであった。第1は「自分で考えろ」ということで、高校時代までのように他人から指示されるのを待つのではなく、物事の善悪の判断や生活習慣などの自己管理について自分で考えて自主的に行えるようになることを最優先にしている。従って、当然のことではあるが授業には毎時間休まず出席することを課しているという。第2は「周りの仲間のことを考えろ」ということで、挨拶や時間を守ることなど社会人として守るべきルールについて厳しく指導しており、遅刻をしてチームに迷惑をかけた学生は試合のメンバーから外すなど厳しく対応している。第3は「お世

話になった人（恩師など）を大切にしろ」ということで、お盆やお正月に帰省した際には、必ず恩師を訪ねて、成長した自分の姿を見てもらいなさい。そしてその際に、恩師からどのような言葉をかけてもらえるかで、自分の成長度合いが分かるとも論じている。第4は「周囲から必要とされる人間になれ」で、自分の事だけでなく、周囲の人たちにも目配りと気配りができるような信頼される人間になれということである。監督の話には、サッカー部の活動中だけでなく、それ以外の場面でも陰ひなたなく真面目にこれらに取り組む学生の教育に努めていることが窺える。例えば、サッカー部監督は、教職科目担当教員などとは違って、4年間毎日のように学生と接しており、彼らのほんの小さな日常生活上の変化をも見逃さずに、的確な指導やアドバイスを施すとともに、毎学期ごとには面接を行って学生の悩みや進路の相談にも親身になって乗るなど、学生指導や進路指導（キャリア教育）にも力を入れており、サッカー部の指導は目の前のサッカーの試合に勝つことのみを目的としているのではなく、人生の勝利者になることを学生たちに教えているようにも思える。大学教育の課外活動（クラブ・サークル活動）において、これらの指導やアドバイスを受けた学生、特に教職課程受講学生にとっては、このときの被教育体験が、将来、学校現場に立ったときの生徒指導や進路指導（キャリア教育）における実践的指導力（体罰禁止など生徒への接し方や指導方法など）の中核部分を形成することとなり、教員養成においても、大学のクラブ・サークル活動指導者の果たす役割は大きいものがあると考えられる。

筆者も授業において、個性発揮の前に、まず時間厳守や授業前後の挨拶の励行など、将来教壇に立つ者として身に付けておかなければならない基本的な事柄や教育社会人として常識やマナーなどを厳しく指導しており、サッカー部監督と共通したところがあり、両者の指導が相乗効果を生めばよいと考えている。そのことが本学の建学の精神である「自分で考え、自分で行なえる人間づくりをめざす大学」にも叶うものだと考えている。このように教職課程受講学生が大学の部活動で受けた被教育体験が、教職科目の特別活動や生徒指導・進路指導（キャリア教育）などの理解に大いに役立っていると推測され、教職は教職科目だけでなく、学生が自主的に参加する部活動やボランティア活動などの課外活動を含めたあらゆる教育活動の中で培われるものだと改めて考えさせられた。このような大学での多様で実践的な被教育体験は、教員養成に効果があり、重要であると思われ、生徒指導・進路指導（キャリア教育）は学校の全教育活動を通じて包括的・系統的・計画的に行うべきものなので、今後とも各先生方や学内の各部署とも連携を取りながら進めていきたいと考えている。

② 授業振り返りシートにみる初年次教員養成段階における教職意識の特徴と課題

「生徒指導の研究（進路指導を含む）」の授業では、毎授業時間後に下記図3のような「授業振り返りシート」（Reflection Paper）を提出させることによって、学生個々人に授業

の振り返りやまとめ、今後の自身の学習課題等について内省させるとともに、次回授業に向けた自覚的・計画的な授業外学習活動を促すようにしている。

図3 「生徒指導の研究（進路指導を含む）」授業振り返りシート

「生徒指導・進路指導」授業振り返りシート Reflection Paper	
平成（ ）年（ ）月（ ）日	
学籍番号（ ）	
氏名（ ）	
① 今日の授業のテーマは？	
② 今日の授業の内容とポイントは？	
③ 自分が今日の授業でクラスまたはグループに貢献した活動内容	
④ 今日の授業の感想・疑問点など（大学の授業では「なぜ」と考える習慣を身につける必要がある。今日の授業で自分なりに「生徒指導・進路指導」について考えたことを書きなさい）。	
⑤ 自分の今後の課題	

上記リフレクション・シートの感想部分を通してみた教員養成初年次段階における教職課程受講学生の教職認識の実態について、その主なものをまとめてみると次のようになる（下線部は筆者）。

○初回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 自分が今まで抱いていたイメージの生徒指導と、本来的な生徒指導の教育的意義との違いを理解することができた。
- B 高校時代には面倒くさい校則などが多くあったが、今となれば自分にとって良かったし、社会に出れるように能力をつけてくれていたので、自分のためだったと思えるようになった。それが今に生きていると思う。
- C 高校の時のルールであったり、規則が生徒指導につながっていて、自分はそれがしっかりと身に付けられていて良かった。
- D まだ、最初のほうなので、これから授業をしっかりと学んでいきたいと思う。

<自分の今後の課題>

- A もっと詳しく生徒指導について調べる。
- B 自分がその立場に立ってみたときに、生徒を安心させられるような人間になる必要があると思った。

- C 授業の要点をしっかりとまとめ、復習でより詳しく調べる。
- D 予習・復習をしっかりとやる。

○中間回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 何気なく生きてきた、この20年間の人生は、スーパーやエリクソンが昔から唱えていたことで不思議な感じがした（人格理論・発達理論）。総合学科という学科名がなかなか出てこなかったのも、しっかりと覚えておきます（進路指導）。生徒指導は、すべての面に深く関係していることに気づくことが大切だと思った（生徒指導の理論と性格）。カウンセリング理論にはいろいろあるが、人によってあったやり方があるんだと分かりました（カウンセリング理論）。学社移行教育の大切さを学びました。進路指導は、生徒の今後の人生に大きな影響を与えるので、大切だと思いました（進路指導の理念と性格）。日本語で理解できないことも、英語に直してみると分かるという発想がとても新鮮ですごかった（生徒理解の意義と内容）。心理検査を自分でやってみて、とても疲れました（生徒指導における心理検査の活用）。学校の中には校務分掌があり、それぞれの教師にいろいろな役割が与えられていることが分かった（生徒指導・進路指導の校内組織）。定時制高校には、給食・補食制度があるとは知りませんでした。人権教育部はどの学校にも設置するべきだと個人的には思いました（生徒指導・進路指導における教師の役割）。相談に乗るときは、生徒の心を理解することが重要だと思いました（進路相談の方法と技術）。生徒指導・キャリア教育を行う上で、教職員の連携がとても大切なので、日頃の教職員会などを大事にするべきだと感じた（生徒指導・キャリア教育の計画と実践）。大人より子どもの方が情報機器に触れる時間は多いと思う。今後の日本では、例えいろいろな理由で中退したとしても（中卒でも）専門職につけたりする時代がきてもいいと思った（不登校・高校中途退学問題）。
- B 人格をしっかりと形成していなければ、大人になったときに、「自分とは何か」が分からなくなるので、出来るだけ早い段階で教育する必要があると思った（人格理論・発達理論）。人は環境に左右されやすいものだと思った（環境論・グループガイダンス理論）。個性の伸長、自己実現などが大事だと思った。また、生徒指導は、すべての教育活動を通じて偏りなくしていくことが大事なことだと思った（生徒指導の理論と性格）。自分が思っていた以上に多くの役割があり、少し驚きました。ドイツでは、学生をしながら働き、社会に出たときに困ることがないようにしているので、日本でもその制度を取り入れて行けばよいと思った（進路指導の理念と性格）。共感的理解をしてくれる教師がいると、その先生に対する信頼ができ、良い影響を与えることができ、すごく大事なことだと思いました（生徒理解の意義と内容）。心理検査をやってみて、自分がどんな性格や能力があるかなどが少し理解できたので良かった（生徒指導における心理検査の活用）。今まで自分が思っていた以上に、学校の組織はすごく大きくて、数も多く、学校

を運営していく中で欠かすことが出来ないものがたくさんあると思いました（校内組織）。校務分掌組織には各部で役割があり、自分が中学生のときに当てはめて考えると、今日学んだ通りのことを先生はしてくれていたので、改めて良かったと思いました（生徒指導・進路指導における教師の役割）。相談は大事だと思いました。家庭環境が異なるなかで、悩みなどを相談することによって、少しでも相談者の気持ちが楽になると思います（進路相談の方法と技術）。生徒指導・キャリア教育に当たって基本的な方針をしっかりとっておかなければ、評価などが出来ないので、基本的な方針が最も大事であると思いました（生徒指導・キャリア教育の計画と実践）。非行に走る少年などには共通の部分があり、早期に発見し対応することが大事になってくると思う（生徒の問題行動）。高校中退後のケアを大事にしていくことで、その人の人生が変わっていくと思うので、もっと中退者の受け入れ先などがあれば良いと感じました（高校中退問題）。

C 高校には、普通科で大学進学などをめざす所と職業科で専門的な知識や技能を身に付ける所と、そのどちらも学

ぶ総合学科があることを知った（進路指導）。人格の形成には、性格＋経験的・後天的性質があることを知った（人格理論・発達理論）。グループガイダンス理論で、PM理論やクラス経営論など様々な角度から物事を見ていかなければならないと思った（グループガイダンス理論）。生徒指導の要素には様々なものが含まれていることを知った。「生きる力」の内容を忘れていた（生徒指導の理論と性格）。重要部分をまとめた、しっかりとしたノートが取れきれず、小テストの点数が悪かった（進路指導の役割）。生徒理解の意味と内容を学び、その方法がたくさんあることも知った（生徒指導の意義と内容）。性格検査をして、自分には気分のムラがあることが分かったので、今後気分のムラをなくしていきたい（心理検査の活用）。学校の校務分掌組織図を学んだ。教師の仕事には様々な業務があり、それぞれに専門の主事・主任を置いていることを知った（教師の役割）。生徒指導の基本方針や忘れず、実践上の課題に取り組めるようにしたい（生徒指導の実践上の課題）。生徒をしっかりと見て、問題行動が起きないように予防することが大事で、その際体罰などを行わずに指導することが大事（問題行動）。時期による高校中退者の数の違いを知った（高校中退問題）。

D 改めて自分がこれまでどのような指導を受けてきたのかを感じる時間となった（進路指導）。自分の人格や性格などを見通したりすることで、自分がどのように変わってきたかが分かった（人格理論・発達理論）。様々な理論があるなかで、どのような問題に対して使えるのかが分かって良かった（環境論・グループガイダンス理論・カウンセリング理論）。小テストの問題を全然解けなかったのもっと勉強しなければいけないと思いました。次はもっと良い点数を取りたいと思いました。指導の取り組み方で、どのような効果があるかが分かった（進路指導の役割）。どうやって生徒に自己理解させるかや、生徒をしっかりと見て判断することなどが分かった（生キャリア教育の計画や教え方が少し分かったような気がします（キャリア教育の計画と実践）。問題行動が今迄

どんな流れのなかで変わってきたかがよく分かったし、どのようなことをしたら体罰になるのかが分かった（問題行動）。

<自分の今後の課題>

- A キャリア教育についてもっと調べてみたい（進路指導）。 いろいろな考え方に触れてみたい（人格理論・発達理論）。 教育相談に乗れるだけの知識の習得（カウンセリング理論）。日本語を英語に直して考えることをもってしてみる（生徒理解の意義と内容）。自分を理解する努力を続ける（生徒指導における心理検査の活用）。自分がやりたい校務分掌について調べてみる（生徒指導・進路指導の校内組織）。小テストで間違いが多かったので、しっかり覚え直しておきたい（進路相談）。小テストの勉強。
- B マズローの欲求段階論に自分をしっかりと当てはめられるようにする（人格理論・発達理論）。将来、自分に子どもができたときに、メディア環境に対してしっかりと理解させないといけないと感じた（環境論）。来週は小テストなので、復習をしてさらに理解できるようにしたい（生徒指導の理念と性格）。友達にも共感的理解を深めていけたらいいと思った（生徒理解の意義と内容）。ほかの心理検査などにも挑戦してみたいと思った（心理検査の活用）。自分が卒業した高校の校務分掌組織について詳しく知るべきだと思った（校内組織）。もっとキャリア教育などについて深く知る（生徒指導・キャリア教育）。実際に対応してみないと分からないことだと思うので、事例などで確認しておく（問題行動）。高校中退を防ぐには、どういやったら良いのかをもっと調べて考える（高校中退問題）。
- C 授業の要点をしっかりとまとめられるようにする（人格理論・発達理論）。忘れ物をしない（生徒指導の実践上の課題）。レポートの仕上げ。
- D 予習・復習（全回を通じて）。小テストの勉強。レポートの作成。

○最終回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- A 生徒指導・進路指導については、イメージの中では単純に怒られること、進路を決めることだけだと思っていましたが、勉強していく中で、とても複雑で、いろいろな制限や条件の中で行われていることがわかりました。
- B 生徒指導は、悪い生徒を指導するというイメージがあったが、授業を通して違うと感じました。困った生徒などを指導することもあり、そこには生徒との信頼関係が生まれてこないと上手には指導できないと思いました。
- C まとめとして、より生徒指導について詳しく知ることができた。良い先生となる為には、生徒から尊敬される教師になる必要があることを知り、教職に就くためにも、自分が今やっていることに意識や自覚をもっておくことが大事だと思った。
- D 生徒の気持ちになって、考えて指導する中でも、個人個人で少し違った考えがあると思うので、そのようなことも頭に入れながら、その個々人の生き方や進路について、どれ

が良いのかを考えて導いてあげるようにしてあげたい。

<自分の今後の課題>

- A 自分が実際の教育現場に立った場合に、生徒の人生に良い影響を与えられる先生になりたいと思いました。そのときは、厳しいと感じられ嫌がられても、その生徒の今後につながる指導をしていきたいと思います。そのために日頃の修練と研究をしっかりとしていきます。
- B 自分が教師になったときには、生徒の理解をどれだけできるかが重要になってくると思うので、生徒の理解というところにポイントを置いて指導できるよう、今後はいろいろな人と関わっていく必要があると思っています。
- C 生徒指導や進路指導を生徒一人一人に合ったものにするためには、日々の観察と指導方法などの能力を高めていくことが必要で、そのためには周りの人や先輩の先生の話聞いて知識を深めようと思った。
- D 15回の授業を通して学んだ内容を忘れずに、自分のなりたい教師像に向かって努力することが大事だと思った。

以上の授業振り返りシートの内容から見えてくる教員養成初年次段階における教職課程受講学生の教職認識の特徴と課題について、まとめると次のようになる。

- ① 初回の授業では、生徒指導概論として、生徒指導と何かということについて、文部科学省の『生徒指導提要』を使用して、高校時代のイメージとしての生徒指導と本来的な生徒指導の目的との違いを比較しながら、教職科目としての「生徒指導の研究（進路指導を含む）」を学ぶ意義について再確認した。授業後の振り返りにおいて、受講学生は、「自分が今まで抱いていたイメージの生徒指導と、本来的な生徒指導の意義との違いについて理解できた」（A）、「高校時代には面倒くさい校則などが多くあったが、今となれば自分にとって社会に出れる能力をつけてくれて良かったと思えるようになった」（B）、「高校時代のルールや規則が生徒指導につながっていて、自分はそれが身に付けられていてよかった」（C）などと、概して生徒指導に対して、生徒の問題行動の未然防止という現実的な問題解決を図る側面だけが強調された生徒指導観を抱いて大学に入学してきていることが分かる。反面、もう一つのすべての生徒の自己指導能力を開発して人格的な成長・発達を促すという重要な側面についての認識に少し欠けている点が、今後の指導上の課題であると見受けられた。このような受講学生の現状を踏まえて、授業では両者のバランスを取りながら、幅広い視点に立って生徒指導・進路指導（キャリア教育）論を進めていく必要があると感じた。
- ② 中間回の授業で、具体的な生徒指導論や進路指導論（キャリア教育論）に関する内容に入ってくると、これまでの被教育者の立場からは見えなかった事柄や内容も増えてきて、ある意味で新鮮な感覚と興味を抱いた学生も出てきた。例えば、人格論・発達

論では、Aは「何気なく生きてきたこの20年間の人生は、スーパーやエリクソンが昔から言ってきたことと同じで、不思議な感じがした」、Bは「マズローの欲求段階論は自分にもしっかりと当てはめられる」、Cは「人格の形成は性格+経験的・後天的性質だと知った」、Dは「自分の人格や性格を見通すことで、自分がどのように変わってきたかが分かった」と述べ、色々な理論が自己理解のために役立って良かったと感じ、また、心理検査の活用でも、Aは「心理検査は疲れたが、自分を理解するのに役立った」、Bは「自分がどんな性格や能力があるかが理解できた」、Cは「自分には気分のムラがあることが分かり、今後改善していきたい」などと心理検査を自分に当てはめて実際にやってみると、学生自身の自己理解にも役立ったと感じるなど、この点においては効果があったと思われる。

次に、この時期の特徴として、教育現場体験の不足等から、実際の学校現場の実情理解については生徒目線からの一面的な見方でしか理解していなかったことが分かる。例えば、Aは「総合学科という学科名がなかなか出てこなかった」「定時制高校には給食・補食制度があることを知らなかった」、Bは「自分が思っていた以上に校務分掌が多く、先生方が見えないところで色々としてくれていたことが分かった」、Cは「総合学科があることを知った。教師の仕事には様々な業務があり、それぞれに専門の先生を配置していることを知った」など、現在の学校制度や学校内の組織等についての理解が不十分なので、教育内容の学習を進める上で、並行して高校現場の実態も知らせていく必要を感じた。教育現場の実情については、自分の育った学校や学科のことは大体イメージできるが、その他の学校や学科については知らないことが多いので、興味深く関心を持って受講生は聴いている。今後は、この時期の指導において、生徒指導・進路指導の理論面だけでなく、実際の教育現場の実情や教師の仕事等について具体的に説明していくことで、現場感覚や具体的に現場で働く教師の姿をイメージしやすくなるのではないかと考える。

- ③ 最終回の授業では、全授業のまとめと質疑応答を行ったが、「生徒指導・進路指導は、イメージでは単純に怒られること、進路を決めることだけとっていたが、とても複雑で、色々な条件や制限の中で行われていることが分かった」(A)、「生徒指導は悪い生徒を指導するというイメージを持っていたが、授業を通じて違いと感じた」(B)、「良い先生になるためには、生徒から信頼される教師になる必要があると知り、自分が今やっていることにも意識や自覚を持っておくことが大事だと思った」(C)、「個々の生き方や進路について、どれが良いかを考えて導いてあげたい」(D)、などと生徒指導の本来の目的と教育的意義について各自が理解を深めるとともに、今後の自分の課題として、「実際の教育現場に立ったとき、生徒の人生に良い影響を与えられるような先生になりたい。そのために日頃の修練と研究をしっかりとやっていきたい」(A)、「自分が教師となったとき、生徒の理解がどれだけできるかが重要になってくるので、そこにポイントを置いて指導できるよう、今後は色々な人と関わっていく必

要があると思った」(B)、「一人一人の生徒に合った生徒指導・進路指導とするためには、日々の観察と指導能力などを高めていく必要があるので、周りの人や先輩の話を聴いて知識を深めようと思った」(C)、「学んだ内容を忘れずに、自分の成り値教師像に向かって努力することが大事だと思った」(D)などと教師になるために必要とされる各自の目標に向けた決意表明が語られている。

これらを、授業の到達目標である「1. 将来教職をめざす者として生徒指導・進路指導に関する基礎的・基盤的な知識・技能を身に付けることができる。2. 生徒理解の方法や生き方の指導に関する理論及び方法について理解できる。3. 実践的に物事を考える態度や学び続けるための思考力を身に付けることができる。」に照らして総合的に考えてみると、1の基礎的・基盤的な知識・技能の習得についての振り返りにおいては、生徒指導・進路指導がすべての生徒の全人的な成長・発達を促す極めて重要な教育的意義を持った取り組みであることを概ね理解させることはできたと思うが、2、3の実際の指導場面での具体的な指導方法や実践的な指導力の育成については、もう少し具体的な場面や事例をもとに、ケーススタディやディスカッションを行うなどして、自分であったらどう考え、どう指導するのが適切かを他の人の意見を聴きながらじっくり考えさせる機会があれば良かったと感じている。

3) 小括—学生の研究レポートから見えてくる教職課程学習の成果と課題—

受講した学生Aの研究レポート題は、「過去の生徒指導による成果と今後の向けての課題について」であった。「はじめに」の部分で、「私は大学に入学してから教師になるために必要な授業を履修してきた。1年次の前期には『日本国憲法』を学び、後期には『教育学原論』について学んだ。2年次には前期で『教師論』を受講し、教師になるために必要な知識や心構えについて学び、その上で後期からは『生徒指導の研究(進路指導を含む)』を学んできた。この授業では、私達の恩師が何気ないように私達を指導していたように見えた内容は、実は深い考えの下に行われていたことを知ることができた。また、自分が教師になって教育現場に立った場合、どのようにすれば生徒に適切な指導・助言ができるのかを考えさせられた。今回のレポートでは、冬休みを利用して郷里の学校に勤務している恩師の先生からいろいろと貴重なお話を聴くことができた。私がめざす立派な教師とはどのようなものか、また、どのようにすれば、それに近づけるのかを、恩師の先生のお話や先行論文・著書を参考にして研究し、自分の見解をまとめてここに記したい。」と述べ、「叱る」生徒指導、いじめに対する毅然とした指導の必要性、生徒指導と心の教育との関係、不登校生への対応の在り方などについて、具体例を挙げながら自分の意見を展開している。特に最初の「叱る」生徒指導については、「叱る」大人の減少とそれがもたらした現代の子供たちへの影響という小題で、「私はこのレポートを作成するに当たって興味深い先行文献を見つけた。それは上地安昭・西山和孝編著の『叱る』生徒指導—カウンセリングを活か

す一』(学事出版、2003年)というものだ。」と触れている点が注目される。レポート作成に当たって、最低3冊以上の活字文献(安易にネット情報に頼らない)に当たることというのを条件にしていたことと、彼が常に問題意識を持って先行文献を探していた結果、その問題解決のヒントになる書物に出会うことができたということである。この貴重な経験が、後々まで「学び続ける教師」を育てる原点になるのではないかと思う。最後の「まとめ」の部分では、「今回、このレポートを作成するに当たって、いろいろな文献や恩師の先生の見解を参考にしてきた。そこで思ったことは、生徒に対する情熱や愛情の重要性というものであった。このことはどこにも書かれていなかったし、恩師の先生もおっしゃってはいなかったが、私は教師としてのあるべき姿であると思った。私はこれまで『叱る』ことと『怒る』ことの違いを知らなかった。生徒を指導するときには、感情的に『怒る』のではなく、冷静に『叱』らないといけないとも思った。現在のいじめや問題行動は、昔と比べて『みえない化』が進んで降り、発見の遅さが重大な問題につながっている。学校内の連携は勿論、家庭や地域、警察や諸関係機関との協力体制が必要だと感じた。これからいろいろな本を読み、いろいろな人の話を聴いて、知識豊かな人間教師になりたいと、このレポートを書いてつくづく思った。」と結んでいる。

この学生の研究レポートから見えてくるものは、教職における3つの出会いの大切さである。第1は恩師との出会いである。第2は書物との出会いである。第3は自分との出会いである。教員養成段階においてこの3つの出会いは、人間成長の面でも、教職科目の学習においても、大きな節目になっていることが分かる。第1の恩師との出会いは、教職をめざす切っ掛けとなり、生徒に対する情熱や愛情が教師に最も重要なものであるということを知ったこと、第2の書物との出会いは、教職科目学習の深化を促す切っ掛けとなり、教育問題解決の糸口にもなったということ、第3の自分との出会いは新たな自己発見の切っ掛けとなり、恩師の話や良書との出会いによって自分の目が開眼し、一気に視野が広がり今まで見えなかったものが見えるようになったこと、というように、教員養成段階にもそれぞれ成長の節目やポイントがあって、そのチャンスを逃さないように、教える側としては、授業の中でこのような様々な出会いの場を準備して、受講生が教職を実感的に感じ取り、自分の将来の目標として展望できるよう、その切っ掛けやヒントを与えることも重要な役割でないかと考えた。

3. 「教育相談」の内容と指導方法

1) 「教育相談」の内容と指導計画

<p>授業の紹介 ／Class introduction</p>	<p>現在、学校現場では急激な社会の変化や価値観の多様化に伴い、生徒の間に不登校やいじめ、集団不適應、校内暴力、非行などの様々な問題が生じてきている。従って、これから高等学校教師をめざす者にとって、教育相談に関する基礎的な知識と基本的な技法の習得は不可欠である。本授業では、高等学校教師に必要とされる教育相談に関する基本的な考え方や、学校における教育相談の在り方について、生徒との日常的なかかわりの具体的な場面を想定しながら事例研究を行うとともに、教育相談の理論及び方法の理解を通じて生徒理解力とカウンセリング・マインドを身に付け、学位授与の方針及び教職に関する知識、技法、態度を修得する。</p>
<p>到達目標 ／Course goals</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒の支援を中心とした学校教育相談的な考え方や捉え方について理解できる。 2. 生徒のニーズに柔軟に対応していくための基礎的な教育相談の知識や基本的な教育相談技法について、グループ学習や体験学習等を通じて実践的に学ぶことができる。 3. 高等学校教師に求められる教育相談についての理論及び方法を理解できる。 4. 生徒理解のためのカウンセリング・マインドを身に付けることができる。
<p>授業計画 ／Class schedule</p>	<p>第1回 オリエンテーション・カウンセリング・マインドとは (P. 37～P. 37)</p> <p>第2回 教師のための学校カウンセリングの特徴 (P. 4～P. 20)</p> <p>第3回 生徒の理解 (P. 21～P. 39)</p> <p>第4回 教師と保護者のコミュニケーション (P. 41～P. 53)</p> <p>第5回 学校カウンセリングの組織と連携 (P. 55～P. 79)</p> <p>第6回 予防・開発的カウンセリング・生徒の状態を把握する (P. 81～P. 100)</p> <p>第7回 生徒同士の理解を深める (P. 101～P. 114)</p> <p>第8回 ソーシャルスキル・ライフスキルを育む (P. 115～P. 154)</p> <p>第9回 キャリア教育 (P. 155～P. 172)</p> <p>第10回 個別支援につなげる学校カウンセリング・集団不適應 (P. 173～P. 191)</p> <p>第11回 不登校 (P. 193～P. 209)</p> <p>第12回 いじめ (P. 211～P. 226)</p> <p>第13回 非行・児童虐待・A S D・P T S D (P. 227～P. 276)</p> <p>第14回 特別支援を必要とするL D・A D H D・高機能自閉症生徒への支援 (P. 278～P. 331)</p> <p>第15回 授業のまとめと質疑応答～生徒の社会的能力を育てるために～</p>

授業時間外の学習 /Overtime studies	毎時間中に質問をするので、テキスト『教師のための学校カウンセリング』の該当ページを予習し、自分なりの意見や感想をまとめておくこと。また、ユニットの区切りごとには小テストを行うので、ノートを取り授業の復習も怠らないようにしておくこと。本学図書館には参考図書が数多く所蔵されているので、積極的に活用すること。
成績の評価 /Evaluation	授業への参加意欲や受講態度を重視するとともに、質問事項への応答内容・主体的な授業参加状況の度合い等（10%）に加え、毎授業後に提出のリフレクションペーパー（10%）、ユニットごとの小テスト（20%）及び学修ノート（20%）・レポート（40%）の成績を総合して評価する。小テストについては、その都度、模範解答を示して講評し、授業時に返却してフィードバックする。
使用テキスト /Textbooks	小林正幸・橋本創一・松尾直博編『教師のための学校カウンセリング』（有斐閣、平成20年）
参考文献 /Reference literatures	菅野純著『教師のためのカウンセリングワークブック』（金子書房、平成13年）一丸藤太郎他編『学校教育相談』（ミネルヴァ書房、平成14年）樺澤徹著『学校カウンセリングの考え方・進め方』（金子書房、平成15年）渡辺三枝子他編『学校に生かすカウンセリング』（ナカニシ出版、平成16年）広木克行著『教育相談』（学文社、平成20年）ほか、必要に応じて授業の中で適宜紹介する。

2) 「教育相談」の指導方法

① 心理諸検査等の受検体験によって得られる自己理解・他者理解の深化と教育相談技法の習得

教育相談は、学校教育を支え、一人一人の生徒の生活と人生を豊かにしていくために行われるものである。そのためには、まず一人一人の生徒について広くかつ深く理解する必要がある。そこで本授業では、「ジョハリの窓」や「交流分析」、「内田・クレペリン検査」等の心理・性格各種テストを積極的に活用して、生徒の自己理解の在り方や生徒理解の具体的な方法等について体験的に学び、将来教員になった場合に、それらを活かして実際の教育現場において多面的な生徒理解ができるよう、また学生自身の自己理解力や教育相談力が身に付けられるよう工夫した。

「ジョハリの窓」は、人間同士が円滑なコミュニケーションを進めるために考案されたコミュニケーション分析のグラフモデルのことで、自分が知っている自分、他人が知っている自分を4つの心の窓（カテゴリー）に分類して理解することによって、自己理解・他

者理解を深め、他人とのコミュニケーションを円滑にするための方法である(7)。主観的に見た自分と客観的に見た自分を知ることができるので、効果的な自己分析にも役立ち、併せて他人の存在が自己開示を広め、自己理解を深めて、個人や集団の自己成長を促す点において、学校現場の教育相談活動にも応用することができる。授業では、下記図4のような「私ってどんな人」というジョハリの窓作業シートを準備して、自分の性格だと思う要素を書き出すとともに、相手の性格だと思う要素を同じく別の紙に書き出して、その人に渡すよう指導した。その後、それらを整理して現在の自分についての自己分析表を整理させた。次に、自分の自己分析表の見方について、私たちは皆それぞれに、この4つの窓を通して他人と関わりコミュニケーションをとっているが、この4つの窓の仕切り線は、自分の意思や努力で自由に動かすことができるところに特徴があり、今後重要なことは、如何にしてこのAの解放の窓を広げていくかという点にあることを詳しく説明した。

図4 私ってどんな人(「ジョハリの窓」作業シート)

私ってどんな人	
A 開放の窓 open self (共有された部分)	B 盲点の窓 blind self (気付かない部分)
C 秘密の窓 hidden self (伝わっていない部分)	D 未知の窓 unknown self (可能性の部分)

Aの開放の窓は、自分も気付いていて、他人も知っている自分で、この領域を広げることで、より良い人間関係を作り、自己実現に向かいやすくなる部分である。具体的には、自分を隠さないで、他人のアドバイスをフィードバックするとともに、未知の領域へもチャレンジすることで、解放の窓が広げて行くことができる。Bの盲点の窓は、他人には見えているが、自分では気付いていない自分で、他人の見方や見解を素直に受け容れること(フィードバック法による改善)で解消できる部分である。従って、他人からのアドバイスや協力をフィードバックすることが必要である。Cの秘密の窓は、他人には見せていない自分で、他人も気付いていない自分で、出来るだけ自分を表現することで解消できる(自己開示法によって改善できる)部分である。Dの未知の窓は、自分も周囲の他人も気付いていない自分で、自分自身に意識を向け、自分を表現したり、他人の意見を聞いたりすることで解消できる部分である。

最後のまとめで、相互の自己分析表を見比べながら、相互理解を深めるとともに、今後

の自分の課題についても考えさせた。学生はそれぞれに真剣な眼差しで自己分析表を見ながら、改めて自分自身と向かい合い、今後の自己成長に向けた課題等について深く考えている様子であった。教職科目としての「教育相談」の内容についても、生徒理解とは固定的なものではなく、様々な要件や自助努力によって変わっていくものだという事も理解させ、将来教職に就いた場合には、今回の体験的学習を参考にして多面的で柔軟な生徒理解ができるような教師になってほしい旨を伝えた。

さらに「交流分析 Transactional Analysis」の考え方をを用いて、人間関係の構造や原理、自己理解・他者理解についての基礎的な模擬体験学習を行った。「交流分析（TA）」は、1957年にアメリカの精神科医エリック・バーンによって提唱されたパーソナリティ理論で、自己発見の方法や対人関係を円滑にするために活用されている。TAでは、人は誰も自分の中に、P（親、Parent）、A（大人、Adult）、C（子ども、Child）の「3つの私（自我状態）：PACモデル」を持ち、さらに言えばCP（父親的で厳格な親、Critical Parent）、NP（母親的で養護的な親、Nurturing Parent）、A（大人、Adult）、FC（本能的で自由奔放な子ども、Free Child）、AC（親に従順な子ども、Adapted Child）という「5人の家族（自我状態）」を宿していると考えられており、人と人との交流するときには、これらの3つないし5つの心（自我状態）の相互交流（やりとり）パターンで、相補交流（繋がる交流）、交錯交流（途絶える交流）、裏面交流（裏のある交流）の3つの交流（やりとり）パターンに分けられるとされている。すなわち、自分と同じように、相手の心を3つないし5つの自我状態として理解し、相手のある自我状態から発せられたメッセージを自分のある自我状態が受け取っている（やりとり）と考え、それらを繋がる交流、途絶える交流、裏のある交流として分析し、自律的な交流ができるようにしようとするものである（8）。

授業では、これらの考え方を示した上で、自分の性格や行動のタイプが分かるエゴグラムを用いて模擬体験学習を行った。エゴグラムとは、エリック・バーンの弟子であるジョン・デュセイによれば、「それぞれのパーソナリティの各部分同士の関係と、外部に放出している心的エネルギーを棒グラフに示したもの」である（9）。学生は、設問に答えながら自分の中にある5つの自我状態（心）を素直に開示し、その結果をグラフ化した自分が該当するタイプの解説を読んで、口々に「当たっている」などと感想を述べ合っていた。このような「交流分析」の模擬体験学習は初めてのことで、学生にとっては興味深く新鮮であったようだ。

内田・クレペリン検査については、性格検査のうち、作業検査法の代表として現在多くの企業や官公庁、学校などで利用されている。生徒理解の際に必要なことは勿論のこと、教員採用試験の適性検査においてもY-G性格検査とともに実施されているので、どのようなものを事前に体験的に知っておくことも必要だと考え、授業の中で内田・クレペリン検査の模擬体験学習を行った。受検した学生の反応には、「疲れた」という率直な感想が多かったが、単純な数字の足し算を繰り返す検査の中で描かれる作業曲線によって、情緒

の安定性や仕事にかかる時の態度、仕事の乗り、周りの環境への変化に対する適応力など、受検者の性格や行動、知能などを定型曲線との類似度やズレなどから判定するものであることは、この受検体験とともに記憶に残るのではないかと思われた。

このように教育相談の基礎となる生徒理解の方法には様々なものがあり、単なるイメージや一面的な理解であってはならないことを、心理諸検査等の受検体験学習を通じて理解させることができたと考えている。自己理解と他者理解は比例し、自分が受け容れられる範囲でしか、他人を受け容れることはできないものなので、これらの受検体験を通じて、学生自身が改めて自己理解を深めれば深めるほど、他者理解の度合いも深まっていく相乗効果が生まれてくると思われる。今後とも教育現場で用いられる教育用語などについても、実際の教育現場の実情に応じた事例などを用いて、具体的に説明し、学生が実感を伴いながら理解できるよう工夫を重ねていきたい。

② 授業振り返りシートにみる員養成段階における教職意識の特徴と課題

「教育相談」の授業では、毎授業時間後に下記図5のような「授業振り返りシート」(Reflection Paper)を提出させることによって、学生個人に授業の振り返りやまとめ、今後の自身の学習課題等について内省させるとともに、次回授業に向けた自覚的・計画的な授業外学習活動を促すようにしている。

図5 「教育相談」授業振り返りシート

「教育相談」授業振り返りシート Reflection Paper	
平成()年()月()日	
学籍番号()	
氏名()	
①	今日の授業のテーマは？
②	今日の授業の内容とポイントは？
③	自分が今日の授業でクラスまたはグループに貢献した活動内容
④	今日の授業の感想・疑問点など(大学の授業では「なぜ」と考える習慣を身につける必要がある。今日の授業で自分なりに「教育相談」について考えたことを書きなさい)。
⑤	自分の今後の課題

上記リフレクション・シートの感想部分を通してみた教員養成段階における教職課程受講学生の教職認識の実態について、その主なものをまとめてみると次のようになる(下線

部は筆者)。受講生のうち、F以外は女子学生である。

○初回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- E カウンセリングは、とりあえず相談者の話を聞くというイメージ。「識る」という言葉は初めて聞きました。自分は単に「知る」人ではなく、深く「識る」人でいられるように、これからの授業を学んでいきたい。
- F 関わりを持ち続けてあげないといけない点などから、カウンセリングは簡単な気持ち、無責任な気持ちではいけないと思った。
- G 来談者は自分の中に大まかな答えがあるにも関わらず、相談に来るにはなぜか。相談に来ない人をどうするのか。
- H 進路指導や教育相談に来ない生徒に対して、どのように促していけばいいのかと考えた。

<自分の今後の課題>

- E ノートをつける力、まとめる力を身に付ける。
- F 教養を身に付ける。
- G ノートの取り方を工夫する。
- H 頑張って単位を取ります。

○中間回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- E 学校教育は、私達が通った学校以外に、特別支援学校があることを改めて感じた。教育者はすべての生徒と向き合わなければならない。自分にとって教育しやすい生徒だけ指導するのではなく、発達の遅れのある生徒も指導ができる教育者になりたい（教師のための学校カウンセリング）。私は幼い頃、近所の子たちと外遊びばかりしていた。しかし、今の子どもは、一人遊びなどして「誰か」と遊ぶことが少ない。そんなに年が変わらないのに、このような環境の変化のスピードに驚くばかりである（子どもの理解）。ビデオの保護者同士のコミュニケーションは、見ていて楽しそうだ。初めのほうが、保護者同士で照れくさそうだったが、終わる頃にはよく意見を出していた（教師と保護者のコミュニケーション）。生徒を成長させるのは、教員一人だけの力では不可能なので、様々な人との連繋があつてこそなのだと思います。校外の連携先は知っておくべきだと思う（学校カウンセリングの組織と連携）。現在、足の不自由な学生が一人いますが、友人と話すとき、その学生のことを足に障害をもっているという表現していましたが、今夏の授業でその言葉は適切ではないということを知り驚きが大きいです（予防開発的カウンセリング）。まさか、自分たちでビデオのエクササイズをするとは思っていませんでした。今でも照れくさい（生徒同士の理解を深める）。周りを気にする年齢のときに、このような授業があれば、人の温かさなどを感じて、コミュニケーションが増える気がし

た（ソーシャルスキル教育）。ライフスキル教育は、日本では「生きる力の育成」のことであり、同時にキャリア教育にもつながっていることを知った（ライフスキル教育）。集団になじめない生徒は、人と関わろうとしない非社会的行動をとる生徒と、感情をコントロールできずに攻撃的になる反社会的行動をとる生徒に分けられることを知った。非社会的行動をとる生徒は、反社会的行動をとる生徒より見つけにくいと思った（集団不適応）。不登校の原因として考えていたことは、学校内の人間関係が大きいと思っていましたが、今は、親からの期待による、理想と現況とのギャップも大きいことを知った。定時制・通信制の生徒の中には、色々な事情があって入学しているケースがあるので、入学までの過程を考えながら接することが重要だと思う（不登校）。いじめはどのようにしたらなくせるかについて、今まで何度も考えたことはあるが、社会問題になるぐらいなのだから、そんな簡単にはなくなるものではない。でも、あきらめるのではなく、防止できるよう努力していくことは大事だと思う（いじめ）。第3波から第4波にかけて非行の種類が増え、非行をする年齢が低年齢になっているのは驚きだ。非行する子供達への対応は、いじめの問題より難しく思えた（非行）。私が小学生の頃には、クラスにLD、ADHD、高機能自閉症などの障害のある人はいませんでした。クラスの中にこういう子どもがいると、周りの子どもたちとの関わりが難しいし、障害のある子どもへの支援も難しいと思いました（特別支援）。

F 学校カウンセリングの活動では、個性を伸ばすために教育的価値と社会的価値とを上手に折り合いをつけていかねばならないと思った（学校カウンセリング）。自分が成熟していないのに、教える側の人間として相応しいのか、と疑問に思った（子どもの理解）。生徒だけでなく、保護者との関係性も良好にしないといけないので、苦勞するだろうと思った（教師と保護者のコミュニケーション）。障害を持つという部分は差別的な意味合いが含まれているということが分かった。これから教師をめざす者として、一つ一つの言葉遣いを勉強していくべきだと感じた（予防開発的カウンセリング）。構成的グループエンカウンターを行った際に、どうしてもここを開こうとしない、しゃべらない生徒への対処法について想像がつかない（生徒同士の理解を深める）。挨拶一つをとっても、なぜ挨拶が重要かを理解することで、物事に対する考え方が変わるということが分かった（ソーシャルスキル教育）。コミュニケーションスキルを身に付けられるような教育方法が万人にできるか疑問に思った（ライフスキル教育）。非社会的行動をとっている生徒に対して、対人恐怖をもっている生徒へはどういったアプローチをとれば良いのか疑問に思った（集団不適応）。いじめを防ぐためには、改革に近い何かをしないと防ぐことは出来ないのだと思った（いじめ）。非行は隠れて行おうとするので、大人が本気で止める気持ちがないと防げないと思う（非行）。高機能自閉症の特徴などは、すぐ見て判断できるわけではないので、決めつけて行動するようなことは気をつけなければならないと思う（特別支援）。

G なぜスクールカウンセラーを正規で雇わないのか、不定期ではなく、常にいてもらった

方が良いのでは？（学校カウンセリング）。なぜ青年期の特徴に個人差があるのか（青年期の特徴）。なぜ教師に責任転嫁するのか（教師と保護者のコミュニケーション）。どうすれば少しでもいじめが減るのか（予防開発的カウンセリング）。楽しくコミュニケーションをとれるのは良いことだと思った（構成的グループエンカウンター）。なぜ名前を呼んでもらえると嬉しくなるのか（ソーシャルスキル教育）。なぜ他人に暴力を振るうのか、また、そういった生徒に対してどう対応すればよいのか（集団不適応）。なぜいじめを行うようになるのか、なぜそれを悪いことと認識しないのか（いじめ）。非行には波がある、時代ごとの特徴を考える（非行）。

- H 個を支えながら集団の質を高めてまとめていくことは、難しい課題だと思った。ハンデイのある子供達と接する機会が今迄あまりなかったので、そういう機会を増やしたい（学校カウンセリング）。自分の事を理解するのも難しいことなのに、人の事を理解するのはもっと難しいことだと思った（子どもの理解）。生徒だけでなく、親とのコミュニケーションも大切だということが分かった（教師と保護者のコミュニケーション）。目に見えないいじめが多いので、予防していじめがなくなればいいなと持った（予防開発的カウンセリング）。実際にやってみると、いろんな意見があることが分かって新鮮だった（構成的グループエンカウンター）。相手の存在を認めることで、仲間が増え、相手と仲良くなる切っ掛けになる。生徒一人一人を理解するのは大変だと思う（集団不適応）。不登校になる理由やいじめなど、色々な要因が関係していることが分かった（不登校）。早期発見で、いじめをなくしていけばいいなと思う（いじめ）。非行を出来るだけ少なくしていかなければならないし、少年法の改善も必要なのかなと思った（非行）。障害のある人と普段接することがないので、あまり意識したことがないが、改めてどんなふうに接するのかを考えようと思った（特別支援）。

<自分の今後の課題>

- E 分かり易いノートの作成（教師のため学校カウンセリング）。連携に必要な能力を身に付ける（学校カウンセリングの組織と連携）。授業中の姿勢が悪いので気をつけたい（予防開発的カウンセリング）。小テストの勉強。レポートのテーマが決まって、次回から資料集めをしていきたい。
- F 特別支援学校などの内容も勉強していかなければならない（教師のための学校カウンセリング）。教養を身に付け、教育者として相応しい人をめざす（子どもの理解）。学力の向上。適切な日本語での受け答えが必要だと感じた（予防開発的カウンセリング）。物事の本質を理解したい（構成的グループエンカウンター）。WHOなどの取組内容を調べる（ライフスキル教育とキャリア教育）。集中力を磨く。要点を理解してノートをとる。
- G それぞれのカウンセリングの特徴をまとめる（学校カウンセリング）。ノートを忘れたので、自分でまとめておく。色ペンを使って分かり易くノートをとる。命に係わる問題なので、重点的に学ばないといけないと思った（予防開発的カウンセリング）。レポー

トの資料を集めなきゃー。レポート書かないとマズイです。

- H もう少しノートをとるスピードを上げて空白を少なくする（学校カウンセリング）。予習をしっかりとる。ノートにメモを増やす。色ペンを使う。復習。小テストの勉強。レポートの作成。

○最終回授業後のリフレクション・シートの内容

<感想・疑問点など>

- E 全体の講義を振り返って、カウンセリングは、問題が起きてからの対応ではなく、起きる前の予防するカウンセリングもあることを知った。構成的グループ・エンカウンターエクササイズは、自分にもできそうなので、将来、教師になることができたなら、やってみようと思った。
- F 青年期の特徴をしっかりしたうえで接するといったことをしないと大人の考え方で接すると衝突してしまうであろうと思った。生徒と接する上で、一番重要なのは、生徒一人一人の心情をその場で見抜いてあげることが、生徒と関わる上で大切だと思った。
- G カウンセリングと聞いても、話を聞くイメージしかなかったので、今までの授業を通じて、こんなにできることがあるのかと思いました。エクササイズもそうですが、生徒の立場や環境によって、私は何をすべきかを考えなければいけないと思いました。
- H 教育だけでなく普段の生活にも、カウンセリング・マインドは活かしていけるのではないかと思った。学んだ事を活かして、何か自分の将来につなげたいと思った。

<自分の今後の課題>

- E ノートは計画的にしておけば良かったと思った。
- F 具体的な説明ができるようにする。教養をもっと持たなければならないと感じた。
- G レポートを完成させる。
- H レポートを仕上げる。

以上の授業振り返りシートの内容から見えてくる教員養成段階における教職課程受講学生の教職認識の特徴と課題について、まとめると次のようになる。

- ① 初回の授業は、学生にとって「教育相談」という言葉との最初の出会いであるが、一般にとりあえず相談者の話を聞くというイメージぐらいしか持っていないことが分かる。また、GやHのように「相談に来ない生徒に対してどうすればいいのか」という素朴な疑問を発するところから逆に推測すれば、教育相談は悩みを持っている生徒が相談に来るものだと考えているようである。急激な社会の変化や価値観の多様化などに伴い、現在、学校現場では生徒間に不登校やいじめ、集団不適応、校内暴力、非行などの様々な問題が生じてきている。これから高等学校教師をめざす者にとって、教育相談に関する基礎的な知識と基本的な技法の習得は不可欠となっている。そこで学校教

育の様々な場面における教育相談の重要性を概説すると、Fのように「教育相談は簡単な気持ちや無責任な態度で行ってはいけない」と思うようになり、授業後の振り返りでも、Fは「教養を身に付ける」ことを自らの今後の課題に挙げ、本授業を教職をめざすための幅広い学習の一環として捉えているが、他の学生は授業内容をしっかり理解できるよう、ノートの取り方や内容のまとめ方などより具体的な学習活動の課題等について言及するなど、学生によって授業に取り組む姿勢や取り組み方に差があることが分かる。

- ② 中間回の授業では、学生にとっては初めての内容ではあるが、学び続けるにつれて「生徒を成長させるには、教員一人だけでは不可能なので、様々な人との連繋が必要である。ライフスキル教育は『生きる力の育成』であり、キャリア教育にも繋がっていることを知った」(E)、「保護者との関係性も良好にしないといけない」(F)、「生徒だけでなく、親とのコミュニケーションも大切であることが分かった」(H)などと教育相談業務は教員だけが生徒に対応するのではなく、保護者や学外の専門諸機関との連携も大切であることを理解し始めている。しかし、具体的な教育相談の方法や問題解決法などについては、「非社会的行動をとる生徒は、反社会的行動をとる生徒より見つけにくいと思った。いじめは簡単になくせるものではないが、諦めるのではなく、防止できるように努力していくべきだ」(E)、「自分が成熟していないのに、教える側の人間として相応しいのかと疑問に思った。コミュニケーションスキルを身に付けられるような教育方法が、万人にできるのか。対人恐怖を持っている生徒へはどういったアプローチをとればよいのか」(F)、「なぜいじめを行うのか、なぜそれを悪いことだと認識しないのか」(G)、「自分のことを理解するのも難しいのに、他人のことを理解するのはもっと難しいと思った」(H)などと、現在教育現場で起こっている様々な問題への率直な感想とともに、自分がそれらを解決するための資質を果たして持っているかどうかについて、ある種の不安と戸惑いを感じている学生もいることが分かった。

次に、この時期の特徴として、学生のこれまでの被教育体験から得られた限られた知識と、実際の学校現場の実情との間に様々な認識のズレが散見されることである。例えば、教育相談はすべての生徒を対象とし、その成長を支援する役割があるが、特別支援学校の存在や普通学級にも特別に支援を要する生徒がいることについて、Eは「私のクラスには障害のある人はいませんでした。障害のある子どもへの支援は難しいと思いました」、Fは「『障害のある』と『障害を持つ』という言葉の違いの間には、障害に対する認識に大きな違いがあることを知り、教師をめざす者として正しい言葉遣いを一つ一つ勉強していくべきだと感じた」、Hは「ハンデのある子どもと接する機会が今迄あまりなかった(障害のある人と普段接することがない)ので、あまり意識したことがなかったが、改めてどう接すれば良いかを考えようと思った」などと、多様化する生徒の実態等に気付いていないケースが多々見られた。この点は、今後と

も筆者の特別支援学校長時代の経験を事例として、特別支援を要する生徒や保護者への接し方や学習・行動支援の方法等について詳しく説明していく必要があると感じた。

- ③ 最終回の授業では、全授業のまとめと質疑応答を行ったが、「問題が起きてからの対応ではなく、起きる前の予防するカウンセリングもあることを知った。また、構成的グループ・エンカウンターエクササイズは、自分にもできそうなので教師になったらやってみようと思った」(E)、「生徒と接する上で、一番重要なのは、生徒一人一人の心情をその場で見抜いてあげだ」(F)、「教育相談と聞いても、話を聞くイメージしかなかったので、授業を通じてこんなに出来ることがあるのかと思った」(G)、「教育だけでなく、不断の生活にも、カウンセリング・マインドは活かしていけると思った」(H)、という授業内容に関する感想とともに、自分の理解の仕方や考え方が変わったことを肯定的に捉えて、それを今後活かしていこうとする決意も語られているところに注目したい。

これらを、授業の到達目標である「1. 生徒の支援を中心とした学校教育相談的な考え方や捉え方について理解できる。2. 生徒のニーズに柔軟に対応していくための基礎的な教育相談の知識や基本的な教育相談技法について、グループ学習や体験学習等を通じて実践的に学ぶことができる。3. 高等学校教師に求められる教育相談についての理論及び方法を理解できる。4. 生徒理解のためのカウンセリング・マインドを身に付けることができる。」に照らして総合的に考えてみると、1の教育相談的な考え方や捉え方については、教育相談が単に限られた生徒を対象とした悩みの相談ではなく、すべての生徒の成長にとって予防開発的な側面もあり重要であることを理解させることはできたと考えられるが、2、3の理論と実践的理解については構成的グループ・エンカウンター体験的学習は効果的であったが、他の方法をもう少し導入できれば、さらに実践的理解が進んだと思われる。また、4の生徒理解のためのカウンセリング・マインドの体得については、理論としてはその重要性を概ね理解してくれたと思われるが、具体的な実践場面での体得については今後の課題として残った。従って、今後とも学校における教育相談の在り方について、学生と共に、生徒との日常的なかかわりの具体的な場面を想定しながら事例研究を行うとともに、教育相談の理論や方法の理解を通じて学生の生徒理解力の向上とカウンセリング・マインドの体得をめざして工夫改善に努めていきたい。

3) 小括 —「学び続ける教師」と「学びほぐし」という学び方—

「学ぶ」という行為には、learn (学ぶ)、relearn (学びなおし)、unlearn (学びほぐし)の3種類がある。このうち特に3番目のunlearnについては、最近、学習棄却、学びほぐし、脱学習などと訳されて注目されている。いったん学んだ知識や行動様式、既存の

価値観や思い込みなどを意識的に忘れて、学びなおすことで、硬直化した自分の思考様式や行動様式を解きほぐし、継続的な成長を遂げるために、従来型の learn(学習)と unlearn(学びほぐし)という一見相反する学びのサイクルをスパイラル的に回していくことが必要とされている。その上で新たな価値観や行動様式を再学習することで、鶴見俊輔氏は「Unlearn とは、単に棄て去る、忘れるの意味ではなく、今までに学んだ事柄を、既習の知識に囚われず、いったんふるいにかけてみる、ということである。一言でいえば『学びほぐし』、私の好きなコトバである。既製品のセーターを編み直し、自分の体系に合うよう作り直すこと、という理解しやすい」と述べている。すなわち、「学びほぐし」とは、知識として吸収したものを自分の経験に照らし合わせて解釈し直すことで、自分なりの言葉で語るということである(10)。

学生は、これまで学校教育や生活・社会体験を通じて、様々な知識や行動様式を学び身に付けてきたが、それは主として「真似る」、「おぼえる」という行為から始まっていることが多い。佐伯胖氏は、「おぼえること」(可逆的)と「わかること」(非可逆的)の違いについて述べた後で、「わかる」とは①分からないところがわかる、②絶えざる問いかけを行う、③無関係であったもの同士が関連づいてくる、④死に至るまでわかり続けていく、そしてますます深く、ますます広く分かり続けていくことであると説明している。また、「何のために学ぶのか。それはわたしたち自身が『より人間的に』なるためである。何のために教えるのか。それはわたしたちが、子どもたちを『より人間的に』したいからであり、世の中を『より人間的に』していく人々の営みや文化の創造に、彼らも参加していけるようにしたいからであろう」と述べ、「人間とは何か」という絶えざる問いなおしを忘れては、本当の「学び」は成立しないと、そこに学びつづける存在としての人間の価値があると述べている(11)。

これらを踏まえて、学生が大学において教職課程の教職科目を学ぶにあたって必要なことは、「おぼえる」学習から「わかる」学習への意識転換と授業方法の体験的習得、絶えざる「学びほぐし」という視点と学び方を通じて「学び続ける教師」となるための基礎的・基盤的な自己教育力を育成することである。そのためには、自分がこれまで行ってきたことを批判的に振り返るリフレクション(内省)のプロセスが欠かせない。その意味でも、授業毎授業時間後に提出させる「授業振り返りシート」(Reflection Paper)には、学生個人に授業の振り返りとともに、今後の自分自身の教職課程学習に向けた課題等について深く内省させる役割があると考えられるので、今後ともその内容の改善を図りながら、これを継続して学生の学習態度や教職観の変容過程を注視していきたい。

4. 「特別活動」の内容と指導方法

1) 「特別活動」の内容と指導計画

授業の紹介 /Class introduction	特別活動は、各教科の学習とともに高等学校の教育課程の中で重要な位置を占める教育活動で、ホームルーム活動、生徒会活動及び学校行事の各内容から構成されている。本授業では、特別活動の教育的意義やその内容、指導方法等について理解を深めるとともに、高等学校教師に求められる特別活動指導における実践的な指導力を身に付け、学位授与の方針及び教職に関する知識、技法、態度を修得する。
到達目標 /Course goals	<ol style="list-style-type: none"> 1. 望ましい集団活動を通して、心身の調和的発達や個性の伸長、よりよい生活や人間関係を築くための自主的・主体的態度の育成、人間としての在り方生き方について自覚できる。 2. 特別活動の目標や内容、指導方法等について、グループ学習などの体験的な活動を通して深く理解できる。 3. 特別活動の取扱い方や指導方法を身に付けることができる。
授業計画 /Class schedule	第1回 オリエンテーション・高等学校学習指導要領改訂の趣旨と要点 (P. 1～P. 5) 第2回 特別活動の目標と各活動・学校行事との関連 (P. 6～P. 10) 第3回 特別活動の基本的な性格と教育的意義 (P. 11～P. 17) 第4回 ホームルーム活動の目標と内容 (P. 18～P. 32) 第5回 ホームルーム活動の指導計画と内容の取扱い (P. 32～P. 44) 第6回 生徒会活動の目標と内容 (P. 45～P. 49) 第7回 生徒会活動の指導計画と内容の取扱い (P. 49～p. 56) 第8回 学校行事の目標と内容 (P. 56～P. 63) 第9回 学校行事の指導計画と内容の取扱い (P. 63～P. 69) 第10回 特別活動の全体計画作成に当たっての配慮事項 (1) 生徒指導機能 (P. 70～P. 75) 第11回 特別活動に全体計画作成に当たっての配慮事項 (2) ガイダンス機能 (P. 75～P. 76) 第12回 特別活動の内容の取扱いに就いての配慮事項 (P. 77～P. 79) 第13回 入学式・卒業式などにおける国旗及び国家の取扱い・特別活動担当教師 (P. 80～P. 82) 第14回 特別活動における評価・総則関連事項 (P. 83～P. 86) 第15回 これまでの授業のまとめと質疑応答～特別活動の教育的意義についての再確認～
授業時間外の学習 /Overtime	毎回授業中に質問をするので、テキスト『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』の該当ページを予習し、自分なりの意見や感想をまとめておくこと、また、ユニットの区切りには小テストを行うので、ノートをとり授

studies	業の復習も怠らないようにしておくこと。本学図書館には、特別活動関係の参考図書が数多く所蔵されているので、積極的に活用すること。
成績の評価 ／Evaluation	授業への参加意欲や受講態度を重視するとともに、質問事項への応答内容・主体的な学習状況の度合い等（10％）に加え、毎授業後に提出のリフレクション・ペーパー（10％）、ユニットごとの小テスト（20％）及び学修ノート（20％）、レポート（40％）の成績を総合して評価する。小テストについては、その都度、模範解答を示して講評し、授業時に返却してフィードバックする。
使用テキスト ／Textbooks	文部科学省『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』（海文堂出版、平成 21 年）
参考文献 ／Reference literatures	堀井啓幸他編『特別活動の理論と実践』（教育開発研究所、平成 28 年）山口満編『改訂新版 特別活動と人間形成』（学文社、平成 22 年）高橋哲夫他編『特別活動研究 第三版』（教育出版、平成 22 年）関川悦雄『最新特別活動の研究』（啓明出版、平成 22 年）中野目直明・小川一郎編『現代の特別活動 第 2 版』（酒井書店・育英堂、平成 14 年）山口五郎他編『特別活動の理論と実践 新訂三版』（学文社、平成 14 年）ほか、必要に応じて授業の中で適宜紹介する。

2) 「特別活動」の指導方法

① ホームルーム活動—構成的グループ・エンカウンターエクササイズの「実践例」を用いた体験学習—

高等学校の特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主性、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」で、その内容にはホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の 3 分野がある。この 3 分野のうち、学生に聞いてみると、学校行事は印象に残っているが、生徒会活動やホームルーム活動については印象が薄いという傾向が見られた。これは、多くの学生が、中高時代において本来の特別活動の学びをあまり経験しておらず、その教育的意義についても各教科の授業ほどに感じていなかったという被非教育体験に起因するのではないかと考えられる。また、学生時代に話し合い活動を経験していない教師は、ホームルーム活動における話し合い活動の指導も適切に行えないと思われるので、そこにもホームルーム活動の不活発さの原因の一つがあるのではないかと想像される。このことは総合的な学習の時間などの指導が効果的に行えないことにもつながるので、教職課程の特

別活動の授業においては、話し合い活動の体験と指導の在り方について具体的に取り上げる必要性があると感じた。

ホームルームは、生徒にとって学校生活を送る上での基礎的な生活の場であり、ここを基盤として、生徒は入学から卒業までの間に、学校生活に慣れることから始まり、様々な集団に属して人間関係を築くとともに、各教科・科目等の授業、さらには教育課程外の様々な活動が展開される。ホームルーム活動で育てたい「望ましい人間関係」とは、生徒一人一人が自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割と責任を果たし、互いに尊重し良さを認め発揮し合えるような開かれた人間関係である。このようなクラス内の良好な人間関係の構築には、構成的グループ・エンカウンター Structured Group Encounter が効果的である。構成的とは、人数や時間などの枠を与えるということで、エンカウンターとは、出会いであり、本音と本音の触れ合い・交流を表す。構成的グループ・エンカウターの大きな目的は、人間関係づくりと並んで、生徒の自己発見を助けることにある。また、他者を知ることで自分を知るとともに、自己表現の多様性を学ぶことで自分の在り方について気づきと行動化を促す。仲間との触れ合いを促進するだけでなく、今をどう生きるか、またこれからどう生きていくかという自分のテーマに向き合う体験であり、その切っ掛けを与えるのが様々なエクササイズである。このようなエクササイズを積み重ねることで、他者への理解が深まり、生徒の仲間意識、そして生徒と教師との信頼関係が自然に育まれ、触れ合いのある学級集団を育成することができるのである。

そこで、授業では、特別活動の教育的意義を幅広く具体的に理解できるよう、体験的・模擬的なグループワークを重視して、可能な限り特別活動の学びの特色である話し合い活動を多く取り入れ、その経験を通して司会や話し合いの仕方等を身に付けられるよう工夫した。

まず最初に、構成的グループ・エンカウターの実践例をその方法順に、①導入、②ウォーミングアップ、③インストラクション、④エクササイズ、⑤シェアリング、⑥まとめ、を順番に視聴しながら、学級担任としての基礎的なホームルーム運営力を身に付けられるよう実践的な学習を行った。特に人は行動すると必ず感情が生まれるので、④エクササイズでは、様々なエクササイズを体験させ、そこで起こった感情をお互いに共有することで仲間意識を高める効果が期待できることなどを体験的に学習する機会を設けた。続いて、これらの体験学習を踏まえて、学級経営案の作成と検討を班内で行うとともに、ホームルーム活動の中心となる話し合い活動については、学生たち自身が班活動の中で「年間ホームルーム活動計画の策定」「ホームルーム・レクレーションの内容」「クラス各係の決定」「文化祭・体育祭への参加と諸準備」などについて実際に話し合いをさせ、司会の仕方や話し合いの方法などのノウハウを体験的に学ばせた。

このようなホームルーム活動の指導において必要な基礎的知識・技能としての構成的グループ・エンカウンターは、情報や知識、物事の善悪ではなく、感情の交流を主とした出会いであり、自己についての新たな発見や、他者を深く知り、良いところに気付いて友達

の良さを知るなどして、自己の行動の変容と成長を促すグループ体験学習である。そのねらいは、自己理解・他者理解、自己受容、自己主張、信頼体験、感受性の促進などで、特に重要なのは、⑤シェアリングでの相互の感情の交流であり、みんなで同じ体験をすることで、深いレベルでの感情を共有したり、仲間意識を高めたりできる効果が期待できる。従って、このシェアリングには、じっくり時間をかける必要がある。構成的グループ・エンカウンターは、本音と本音の交流を通じて温かい人間関係をつくることのできるもので、様々な特別活動の指導場面における重要な指導方法の一つとして位置付けることができると考える(12)。

② 生徒会活動と部活動との関連性をどう教えるか一部活動外部指導者の実態と今後の課題を考える中で一

高等学校学習指導要領では、生徒会活動について「生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」ことを目標として、全生徒で組織する生徒会で学校生活の充実と向上を図る活動を行い、その内容は、①生徒会の計画や運営、②異年齢集団による交流、③生徒の諸活動についての連絡調整、④学校行事への協力、⑤ボランティア活動などの社会参加など幅広い分野に及ぶとされている。このうち③の生徒の諸活動についての連絡調整の中には「また、部活動は、学校教育の一環として、スポーツや文化、学問等に興味と関心をもつ同校の生徒が、教職員の指導の下に、主に放課後などにおいて自発的・自主的に活動するものであり、生徒会活動においても部活動に留意することが望まれる」とされ、高等学校学習指導要領の教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項の(13)にも、「生徒の自主性、自発的な参加に依り行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること」と記されている(13)。

本学経営学部で教職課程を受講する学生の中には、運動クラブに所属している者が多い。そして彼らは、将来教職に就いた場合にも、運動部活動の顧問となって生徒を指導してみたいと思っている。そこで、教職科目「特別活動の研究」の中で、高等学校における部活動の実態やその教育的意義、部活動と特別活動との関係性などについて学習しておく必要があると考え、香川県における運動部活動外部指導者の実態と今後の課題について考えさせる機会を設けた。

香川県教育委員会では、部活動の意義について「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養、互いに協力し合って友情を深めるといった好ましい人間観帰依の形成等に資するものである」とし、留意点として「部活動は、教育課程

において学習したことなども踏まえ、自らの適性や興味・関心等をより深く追求していく機会であることから、各教科等の目標及び内容との関係にも配慮しつつ、生徒自身が教育課程において学習する内容について改めてその大切さを認識するよう促すなど、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるようにする」ことを挙げている。配慮事項として「地域や学校の実態に応じ、スポーツや文化及び科学等にわたる指導者など地域の人々の協力、体育館や公民館などの社会教育施設や地域のスポーツクラブといった社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行う」とし、特に枠囲い付きで「各学校が部活動を実施するに当たっては、以上のことを踏まえ、生徒が参加しやすいよう実施形態などを適切に工夫するとともに、休養日や活動時間を適切に設定するなど生徒のバランスのとれた生活や成長に配慮することが必要である」と特記している。また、運動部活動の学校教育における位置づけ、意義、役割などについては、「①運動部活動が学校教育の一環として行われるものである、②運動部活動はスポーツの技能等の向上のみならず、生徒の生きる力の育成、豊かな学校生活の実現に意義を有するものとなること、③生徒の自主的、自発的な活動の場の充実に向けて、運動部活動、総合型スポーツクラブ等が地域の特色を生かして取り組むこと、また必要に応じて連携すること」が望まれている

平成27年度の香川県公立高等学校における具体的な運動部活動の実態については、まず運動部の部数は719で、平成22年度の785から66部減少しているが、外部指導者については85名（学校別採用率87.5%）と、平成22年度の73名から12名増加しており、平成28年度には92名とこの増加傾向は続いている。一方、運動部活動への生徒参加率は、平成27年度は55.3%（男子73.7%、女子38.4%）で、平成22年度の53.7%（男子70.9%、女子37.9%）より1.6%（男子2.8%、女子0.5%）増加している(14)。高等学校の教育現場では、スポーツに親しむ生徒が増える傾向にあるが、それを指導する教員数が少子化の影響で減少するとともに、若い教員が少なく年配教員が多くなるという歪な年齢構成のために、表2のように外部指導者を活用せざるを得ない実情を垣間見ることができる。

表2 平成27年度香川県公立高等学校における運動部活動
外部指導者の現状

NO	種目	人数	NO	種目	人数
1	ソフトテニス	8	13	テニス	3
2	バレーボール	8	14	なぎなた	3
3	硬式野球	7	15	卓球	3
4	サッカー	6	16	新体操	2
5	バスケットボール	5	17	ソフトボール	2
6	弓道	5	18	水泳	2
7	柔道	5	19	自転車	2

8	陸上競技	5	20	ホッケー	1
9	ハンドボール	5	21	水球	1
10	剣道	4	22	ラグビー	1
11	バドミントン	3	23	体操	1
12	ライフル射撃	3			

合計 85 名（前年比 + 6 名）

さらに詳しい香川県公立高等学校における運動部活動外部指導者の実態について、平成 24 年度から平成 28 年度までの外部指導者の活用人数の変遷をみると、次表 3 のように年々増加傾向にあることが分かる。

表 3 香川県公立高等学校における運動部活動外部指導者数の推移

平成年度	24	25	26	27	28
外部指導者活用人数	70	83	79	85	92

また、平成 28 年度における外部指導者活用率は、32 校中 27 校で 84.4%、活用部数は 77 部であった。活用頻度は、92 名のうち、①週 5 日以上が 13 名（14.1%）、②週 3～4 日が 9 名（9.8%）、③週 1～2 日が 41 名（44.6%）、④週 1 日未満が 29 名（31.5%）であり、週 2 日未満が 70 名（76.1%）と一番多いことが分かる。外部指導者に対する報償費の有無については、有が 72 名（78.3%）、無が 20 名（21.7%）であった。報償費の内訳は、国の委嘱事業が 58 名（80.6%）、学校単独事業費（団体費、後援会費等）が 14 名（19.4%）である。この他香川県では、部活動指導中の事故に対する保険加入事業や外部指導者研修会の開催などの支援事業を行っている。このように今日の高校現場における運動部活動の指導においては、外部指導者抜きには語ることはできない現状にあることが分かる。

従って、教職課程における教職科目「特別活動の研究」では、これらの現状を踏まえて、学生の高校時代とは違って、現在の高校現場は大きく変わってきていることを実際の数値で示した上で、今後、高等学校における部活動はどうあるべきかを、高校教育全体の中で考えて部活動指導を行わなければならない状況にあることを理解させる必要がある。また、部活動は生徒会予算とも関係があり、文化祭や体育祭などの生徒会を中心とした学校行事とも密接な関係にあるので、特別活動全体との関連性を考えながら、幅広くその役割を考えさせる必要がある。

3) 小括一高等学校における部活動の役割と今後の課題について一

学習指導要領に初めて部活動と教育課程との関連が明記されたことを受けて、今後、学

校現場では具体的な部活動の在り方について考える必要性に迫られている。具体的な指針として国においては、「運動部活動での指導のガイドライン」（文部科学省、平成25年）に、「外部指導者等の協力を得る場合には、学校全体の目標や方針、各部の活動の目標や方針、計画、具体的な指導の内容や方法、生徒の状況、事故が発生した場合の対応等について、学校、顧問の教員と外部指導者等との間で十分な調整を行い、外部指導者等の理解を得るとともに、相互に情報を共有することが必要です。技術的な指導においても、必要なときには顧問の教員は外部指導者に適切な指示を行うこととして、指導を外部指導者に任せきりとならないようにすることが必要です」と記されている。

香川県教育委員会においては、運動部活動の外部指導者活用について、「多様な生徒のスポーツニーズにより広く応えるためには、少しでも多くの教員が顧問になることを働きかけるとともに、外部の指導者の協力を求めることが必要である」とし、その際には「活動方針や活動計画の作成をはじめ運営全体については顧問が進めること、外部指導者は実技指導面でその顧問を支える人々として位置付けること、学校として校内組織を整え、各顧問が外部指導者との十分な情報交換に留意すること、外部指導者を依頼するにあたっては、学校教育の協力者として年度当初に教職員や生徒に紹介するなどの配慮を行うこと」を条件にしている。また、文化部についても香川県高等学校文化連盟がカルチュアエキスパート活用事業を実施して、文化部活動の健全な育成及び地域との連携強化を図っている。

具体的な取り組みについては、「運動部活動指導の工夫・改善支援事業実践事例報告集」（スポーツ庁、平成27年）を参考にするなどして、今後、教職課程の教職科目「特別活動の研究」等においても、運動部活動の抱える問題点（顧問教員の負担増、指導者不足と指導力不足、行き過ぎた指導と体罰問題等）に配慮しつつ、あるべき部活動像を共有した外部指導者制度の効果的な活用方法や、顧問教員と外部指導者の連携・役割分担等の在り方について教えていく必要があると考えられる。その際、多様化・複雑化する学校の諸課題に適切に対応するための、中央教育審議会答申中にある「チーム学校」とも関連づけながら幅広い視野を持って考えることも必要とされる。

おわりに

大学の教員養成段階において、将来、教職をめざす学生に対して、身に付けさせるべき最小限必要な資質能力や、学校現場が抱える課題に対応した実践的指導力を育成するためには、実際の教育活動の諸場面を想定した内容や具体的・体験的な学習形態を多くするなどして、高校現場に必要とされる「学び続ける教師」の基礎的・基盤的学修を支える「教職科目」の内容と指導方法の在り方について考察した。

まず第一に、「教育は人なり」といわれるように、教育の成否は教師の人間性や資質・能力に深く関わっており、それだけに教職課程を受講する学生には、その崇高な使命感と責任感を自覚させる必要がある。その上で実践的指導力を持ち「学び続ける教師」を育て

るために必要な基礎的・基盤的学修として、①「書く力」を育てることが「考える力」や「学び続ける教師」を育てる上で重要である、②良い先生、良い本に出会うことが最良の教員養成である、③実際の高校現場を想定した授業内容や指導方法が学生を鍛える、④「学び続ける学生」を育てることが「学び続ける教師」に繋がる、など教員養成段階においてポイントとなる視点が見えてきた。教職科目の学習は、将来の就職のための学習ではなく、学生自身の現在の学生生活をどう送るかという現在進行形の学習に関係していることに気づかせることが重要であり、そのような自己改革を迫る授業内容が学生を「学び続ける学生」に育てることに繋がり、ひいては「学び続ける教師」を育てることに繋がるということである。教職には3つの出会い（恩師との出会い、書物との出会い、自分との出会い）が大切であり、教員養成段階においては、特に第3の自分との出会いが最も重要であると考えられる。すなわち、自分との出会いは新たな自己の発見であり、人間成長のチャンスともなるので、授業の中ではこのような様々な出会いの場を準備して、受講生が教職を実感的に感じ取り、自分の将来の目標として展望できるよう配慮することも重要な役割であると思われる。

第二に、多様な学び方を体験することが大切であるということである。「学ぶ」という行為には、learn（学ぶ）、relearn（学びなおし）、unlearn（学びほぐし）の3種類がある。このうち特に3番目のunlearnについては、いったん学んだ知識や行動様式、既存の価値観や思い込みなどを意識的に忘れて、学びなおすことで、硬直化した自分の思考様式や行動様式を解きほぐし、継続的な成長を遂げるために、従来型のlearn（学習）とunlearn（学びほぐし）という一見相反する学びのサイクルをスパイラル的に回していくことが必要とされている。すなわち、「学びほぐし」とは、知識として吸収したものを自分の経験に照らし合わせて解釈し直すことで、自分なりの言葉で語るということである。学生は、これまで学校教育や生活・社会体験を通じて、様々な知識や行動様式を学び身に付けてきたが、それは主として「真似る」、「おぼえる」という行為から始まっていることが多い。従って、学生が教職科目を学ぶにあたって必要なことは、この「おぼえる」学習から「わかる」学習への意識転換と授業方法の体験的習得、絶えざる「学びほぐし」という視点と学び方を通じて「学び続ける教師」となるための基礎的・基盤的な自己教育力を育成することである。そのためには、自分がこれまで行ってきたことを批判的に振り返るリフレクション（内省）のプロセスが欠かせない。その意味でも、授業毎授業時間後に提出させる「授業振り返りシート」（Reflection Paper）には、学生個々人に授業の振り返りとともに、今後の自分自身の教職課程学習に向けた課題等について深く内省させる重要な役割があると考えられる。

最後は、教師として「学ぶこと」の意味を深く理解することの大切さである。佐伯胖氏は「人間とは何か」という絶えざる問いなおしを忘れて、本当の「学び」は成立しないと、そこに「学びつづける存在としての人間」の価値があるとしている。さらに、「学ぶこと」と「教えること」の意味について「何のために学ぶのか。それはわたしたち自身が『よ

り人間的に』なるためである。何のために教えるのか。それはわたしたちが、子どもたちを『より人間的に』したいからであり、世の中を『より人間的に』していく人々の営みや文化の創造に、彼らも参加していけるようにしたいからであろう」と述べている。まさに「教えること」は「学ぶこと」であり、「学び続ける教師」の原点はここにあるといえるのではないか。学校は社会の縮図であり、人間を育てる教育機関であるので、教職に就く者には人間とは何か、人間の生き方などについて深く考えさせる必要がある。特に最近の教育現場の状況を勘案すると、学生をより人間通の教師に育てるためには、教職科目の授業の中に、哲学や倫理学、心理学、歴史学、社会学などの、広い意味での人間学に関する話や資料を取り入れて、教科指導だけではない、もっと幅広い人間性の育成や教育社会人として必要な常識・マナーの習得をも含んだものに教職の学びの内容を広げて、教員養成段階における担当教員は心掛ける必要があると考えられる。

註

- (1) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成 18 年 7 月 11 日中央教育審議会答申）の「4. 教員養成・免許制度の現状と課題」「5. 教員養成・免許制度の改革の方向」。『戦後教員養成論』の基本構図」T E E S 研究会編『「大学における教員養成」の歴史的研究—戦後「教育学部」史研究—』学文社、平成 13 年、24 頁～35 頁。
- (2) 妹尾堅一郎「実務家教員の必要性和その育成について—『実務知基盤型教員』を活用する大学教育へ—」『大学論集』第 39 集、広島大学高等教育研究開発センター、平成 20 年、109 頁～128 頁。現在、大学には従来の「学術知基盤型」教員に加えて、実務界における知を大学に導入する「実務知基盤型」教員が求められているとし、その実践的育成プログラムの事例を紹介している。
- (3) 今泉浩晃『超メモ学入門 マンダラートの技法—ものを「観」ることから創造が始まる—』日本実業出版社、昭和 63 年、189 頁。
- (4) 『生徒指導提要』文部科学省、平成 22 年。「生徒指導に関する教員研修の在り方について」報告書、生徒指導に関する教員研修の在り方研究会、平成 23 年。
- (5) 『高等学校学習指導要領』（平成 21 年 3 月）の総則第 5 款の 5 「教育課程の実施などに当って配慮すべき事項」の (13)。木之下慧剛「学校教育における部活動の役割—高等学校教諭へのインタビュー調査を通して—」九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース修士論文、平成 24 年、3 頁～4 頁。中沢篤史「生徒理解・生徒指導の観点から見た運動部活動と学校教育の結び付き—顧問教師へのインタビュー調査の分析をもとに—」『月刊トレーニング・ジャーナル』27 (4)、ブックハウス・エイチデイ、平成 17 年、46 頁～50 頁。
- (6) 「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」（運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議、平成 25 年）。
- (7) 久瑠あさ美『ジョハリの窓—人間関係のよくなる心の法則—』朝日出版社、平成 24 年、5 頁～7 頁、34 頁～35 頁。

- (8) イアン・スチュアート著、日本交流分析学会訳『エリック・バーンの交流分析』実業之日本社、平成 27 年、34 頁～52 頁。イアン・スチュアート、ヴァン・ジョインズ著『TA TODAY—最新・交流分析入門—』実務教育出版、平成 3 年、4 頁～36 頁。杉田峰康『新しい交流分析の実際』創元社、平成 12 年、15 頁～31 頁。杉田峰康『教育カウンセリングと交流分析』チーム医療、昭和 63 年、1 頁～7 頁。
- (9) 植木清直著・佐藤寛編『新訂版・交流分析エゴグラムの読み方と行動処方』鳥影社、平成 17 年、25 頁。
- (10) 鶴見俊輔『教育再定義への試み』岩波書店、平成 22 年、95 頁～96 頁。慶應 MCC 通信「学びほぐしのすすめ」『てらこや』Vol.135（平成 26 年 5 月 13 日）。P.F. ドラッカーも「知識をラーン（学習）し、リラーン（再学習）し、アンラーン（脱学習）することが知識管理の大前提である」と述べている（小林薫『ドラッカーとの対話・未来を読みきる力』徳間書店、平成 13 年、224 頁。）。
- (11) 佐伯胖『「学び」の構造』東洋館出版社、昭和 51 年、165 頁～169 頁。
- (12) 國分康孝・國分久子監修『学級のあたたかい人間関係をつくるビデオ：こころを育てるカウンセリング「構成的グループエンカウンター」』第 7 巻・高等学校実践例編（テレマック製作、図書文化社発売、平成 11 年）。安部恒久『エンカウンター・グループ仲間関係のファシリテーション』九州大学出版会、平成 18 年、137 頁～150 頁、187 頁～189 頁。
- (13) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』海文堂出版、平成 21 年、6 頁、48 頁、98 頁。
- (14) 『平成 27 年度・香川の学校体育』香川県教育委員会、平成 28 年、38 頁～39 頁、41 頁、45 頁～46 頁。